# 月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.25



## 今回の漫画は4コマ祭！

本編完結 & 単行本最終巻発売記念で
『レーヴェ物語』が４コマに!?
**よりぬきレーヴェさん（嘘）**

太陽の神殿の最奥部に潜む者とは!?
**みんな集まれ！ ファルコム学園**

特別読み切り 1
六角形から奴らがやってきた！
**『ヴァンテージマスター通ります！』**
春過なつき

特別読み切り 2
のほほん特務支援課のシュールな日常？
**『クロスベルぷらす』**
まなぶくん

ドラマCD『英雄伝説 零の軌跡 第４章～忍び寄る叡智～／終章～クロスベルの一番長い日～』
**キャストコメントを独占入手！**

今月は『軌跡』シリーズおなじみの“アイツ”に注目!?
**英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート**

マリアンヌ、命がけの大冒険
**英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット**

**ティオのファルコムラジオ めんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏**

ファルコム jdk バンド ドラマー・オカジの
**人生半キャラずらし**

jdk バンドボーカル・コテカナの
**コテ放題♥**

**ファルコムニュース**

**Falcom FanArt Collection**





FALCOM MAGAZINE

# CONTENTS

THE LEGEND OF HEROES

# 閃の軌跡 リベール通信緊急号外 潜入レポート

リベール通信
帝国支部
**アッシュ洋平**
リベール通信帝国支部の新米記者。先輩のナイアル・バーンズにあこがれ、日々スクープを追う

**主人公たちのプロフィールがついに明らかに！　ゲームのプロローグや世界設定、もちろんスクープ画像まで、今回も情報満載でお届け。**

## Prologue

### 季節は春――若者達は士官学校の門をくぐる



――《エレボニア帝国》。
ゼムリア大陸西部において最大規模を誇るこの旧き大国では、近年、２つの勢力が台頭し、国内における緊張が高まりつつあった。
一つは《貴族派》――
『四大名門』と呼ばれる大貴族を中心とし、その莫大な財力によって地方軍を維持し、自分たちの既得権益を守らんとする伝統的な保守勢力。
もう一つは《革新派》――
平民出身の『鉄血宰相』を中心とし、巨大な帝都や併合した属州からの税収によって軍拡を押し進め、大貴族の既得権益を奪わんとする振興勢力。
両者の立場はどこまでも相容れず、その対立は水面下で深刻化し、皇帝の仲裁も虚しく、帝国各地で暗闘が繰り広げられるようになっていた。
そして、それは帝都近郊にある伝統的な士官学校でも同じだった。
――《トールズ士官学院》。
帝国復興の祖「ドライケルス大帝」によって創設され、身分に囚われない人材育成を目指してきたこの士官学校においても、貴族派の理事と革新派の理事が対立を深め、生徒たちに影響を与えていた。
あらゆる面で優遇され、また実力も兼ね備えた白い制服の貴族生徒たち。
優秀ながらも下に見られ、理不尽感を抱き続ける緑の制服の平民生徒たち。
制服の色や学生寮が違うことも相まって、両者は事あるごとに反発しあい、学業成績や武術訓練、クラブ活動などでも火花を散らし合うのだった。
そんな中、地方貴族の息子、リィン・シュバルツァーは
トールズ士官学院への入学を果たし、帝都近郊の街トリスタを訪れる。
季節は春――白いライノの花が舞い散る中、リィンは気付く。
自分の着た制服が、貴族生徒や平民生徒の制服の色とは違うことを。
少数ではあるが、同じ『深紅の制服』を着た生徒たちがいることを。
そして学院の鐘が鳴り、始まる入学式――
偉丈夫の学院長の堂々たる挨拶が終わり、若き女性教官が壇上に立つ。
「赤い制服の子たちは集まりなさい」
「これから特別オリエンテーリングが始まるわ」
それが――波乱に満ちたリィンたち《VII組》の学院生活の幕開けだった。

## 4人のメインキャラの詳細が判明！



「そなた――どうして本気を出さない？」

### ラウラ・S・アルゼイド

17歳／使用武器：両手剣

帝国においてヴァンダールと双璧を成す武門、アルゼイド子爵家の息女。どこまでも凛とした誇り高い娘だが、ある意味貴族らしい鷹揚さで世間知らず。ただし自らの無知を恥とせず、積極的に学ぼうとする向上心に満ちている。剣匠と呼ばれる父に学び、大振りの両手剣（バスタードソード）を自在に振るう。その実力は天性と努力の賜物で、学院の新入生の中では頭一つ抜けており、同じ剣士として『八葉一刀流』の使い手であるリィンにも興味を示すが……。



「えへへ、ちょっとワクワクしてきたかな。」

### エリオット・クレイグ

16歳／使用武器：魔導杖

帝国軍きっての猛将として知られる『紅毛のクレイグ』の息子。豪傑として知られる父親とは対照的に、紅茶色の髪を持つ優しげな風貌の少年。元々バイオリンやピアノを好み、帝国の音楽院に通うことを望んでいたが、父親の猛反対を受け、さらに思うところもあり、トールズ士官学院への入学を決めた。学院で必須となる武術では、エプスタイン財団の技術を取り入れた、ラインフォルト社の『汎用魔導杖』を選択し、使いこなしていく事になる。



「あなた達――不埒な真似は許さないわよ？」

### アリサ・ラインフォルト

17歳／使用武器：導力弓

帝国最大の重工業メーカー、ラインフォルトグループの令嬢。可憐なお嬢様風の見た目と裏腹に、はっきりした物言いで一見キツい印象。その実かなりのお人好し＆お節介で、困っている人は放っておけないタイプ。グループの会長を務める冷徹な母親に反発し、自立するため士官学院入りを決意した。兵器メーカーとしても有名な実家への当てつけから、伝統的な弓術を士官学院の選択武術で選ぶ。ただし、幼い頃から祖父や使用人から弓の指南を受けていたため、かなりの腕前を持っている。



「自分の“道”を見つける――まずはそこからだ。」

### リィン・シュバルツァー

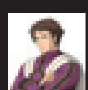
17歳／使用武器：太刀

帝国北部の地方貴族、シュバルツァー男爵の養子。芯のあるまっすぐな性格で、誰とでも打ち解けられる社交性と人の良さを備えるが、養子であることに引け目を感じており、家督を継ぐべきではないと考えている。７年前に老剣客ユン・カーファイと出会い、弟子として「八葉一刀流」の指南を受けてきたが、とある理由で剣の道に限界を感じ、「初伝」を授かるに留まっている。“自らの道”を新たに見出すため「トールズ士官学院」への進学を決意するが……。

## 用語解説

**■ラインフォルト社（ＲＦ／Reinford Industry Group）**
帝国最大にして、ゼムリア大陸でも一二を争う規模の巨大重工業メーカー。元々は中世からの武器工房だったが、半世紀前の導力革命を受けて急成長を遂げ、鉄鋼、鉄道、銃火器をはじめとする武器、戦車などの分野で圧倒的なシェアを独占するに至った。現在はアリサの母、イリーナ・ラインフォルトが会長を務め、帝国軍の近代化を受けて高性能な軍事兵器製造のほか、戦術導力器の研究開発も行っている。ちなみに、カルバード共和国にはヴェルヌ社、リベール王国のツァイス中央工房と、ライバルである企業が存在する。これまでのゲームに登場した取り扱い品は、豪華飛行客船のルシタニア号、オリビエが使っていた銃、導力駆動車、列車、そして軍が使用していた戦車など。本作では、もっとバリエーションに富んだ製品が見られるのかも？

**■緋の帝都ヘイムダル（Heimdallr）**
西ゼムリア大陸で最大級の規模を誇る帝都。緋色のレンガを基調にした美しい街並みで、歴史的な建造物も数多く存在する。近年の導力化を受けて、帝国全土に張り巡らされた鉄道網が帝都に集まるほか、市街には導力トラム（路面鉄道）も通っており、自家用車も増え始めている。都市の北側には皇帝の居城や帝国政府が入る壮麗な「バルフレイム宮」があり、中心には老舗のデパートやオペラハウスが立ち並ぶ華やかな目抜き通りがある。一方、貧民街のような区画もあり、帝国における貧富の格差を如実に示している。



**■ヴァンダール家**
アルゼイド家に並ぶ、帝国の武の名門として知られる名家。皇族の護衛も多く輩出している。オリビエの護衛役兼、お目付け役のミュラーが、この家の出身。

**■トールズ士官学院（Thors Military Academy）**
230年前、帝国中興の祖「ドライケルス大帝」によって設立された伝統ある士官学校。帝都から程近い郊外の街・トリスタにあり、当初は火薬式の銃や大砲を使った近代戦術を学ばせるための本格的な軍事学校だったが、現在では士官学校の体裁を残しつつも貴族の子弟や平民出身の秀才などが集まる「名門高等学校」としての側面が強くなっている。近年、学校の運営面で新たな試みがなされているというが……？

**■エレボニア帝国（Elebonian Empire）**
ゼムリア大陸の西部にある《黄金の軍馬》を紋章に掲げる巨大帝国。大貴族の支配する旧い体制の国家だったが、《鉄血宰相》の異名で知られるギリアス・オズボーンを中心に《改革派》が結成され、現在は《貴族派》と《改革派》と国の情勢が二分された不安定な状態になっている。ただし、オズボーンの台頭はマイナスな面だけではなく、その政策により全土に鉄道網が敷かれるなど、急速に近代化が進んでいる。20以上もの機甲師団のほか、領邦軍（大貴族の私設軍）といった巨大な軍事力を保持しており、リベール王国への侵攻を行うなど、周辺諸国に常に緊張を強いている。ちなみに、今の元首は、オリヴァルトの父であるユーゲント・ライゼ・アルノール。

**『英雄伝説 閃の軌跡』**
**メーカー：** 日本ファルコム
**ジャンル：** ストーリーRPG
**機種：** PlayStation 3、PlayStation Vita
**発売：** 2013年発売
**価格：** 価格未定

とって出し SCOOP!

# UMA 未確認生物 の生け捕りに成功!?

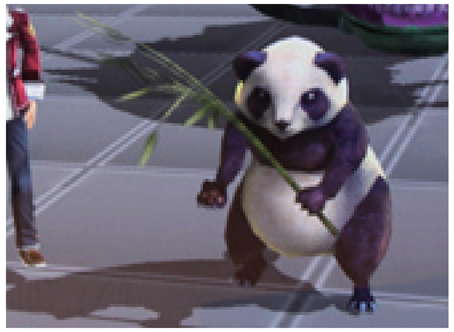


## あの魔獣たちが『閃の軌跡』にも登場！

謎の生物、あらため『閃の軌跡』に登場する魔獣たちを初公開！　本作では、キャラクター同様、魔獣も3Dのポリゴンで表現されるようになった。おなじみの魔獣がどう生まれ変わったか、とくと見よ！

### ササパンダー

**幻のアイツがついに立った!?**



他の魔獣にまぎれて現れる、レアな魔獣。『SC』や『零』では座っていたが、本作では立ち上がって凶悪な姿に！

### ライノサイダー

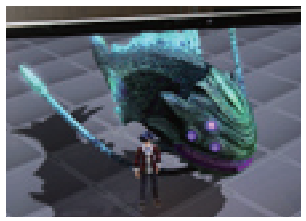
**硬そうな表皮の質感に注目！**



『ＦＣ』で手配魔獣などで登場した強敵。森の奥に生息し、皮膚が鎧のように厚い。キャラクターとのサイズ差に注目！

### サンダークエイク

**極悪さNo.1!? 今回も強敵の予感**



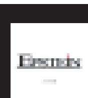
こちらも『ＦＣ』などで手配魔獣として登場した強敵。顔の凶悪さは、今回紹介する魔獣の中でナンバーワン！

### ニガトマトマン

**赤色のニガいヤツ**



にがトマトに酷似した謎の生命体。つぶらな瞳は相変わらずで、魔獣のなかでは珍しく（？）見た目がかわいい。



**■エプスタイン財団（Epstein Foundation）**

オーブメントを開発した天才導力学者Ｃ・エプスタイン博士の業績を受け継いだ財団。レマン自治州に本部がある。研究機関・メーカーとしての側面が強く、通信・情報処理などの分野に特に優れており、クロスベル自治州にて導力通信ネットワークの大規模な実地テストを行っている。ちなみに、この導力通信ネットワークの研究には、リベール王国も協力しているという。また、アーツを発動できる「戦術オーブメント」を開発している有一のメーカーで、現在はそれを発展させた新武装「魔導杖」の開発が進行中。ティオ・プラトーはそのためもあり、クロスベル自治州の特務支援課に所属することになる。

**■魔導杖**

エプスタイン財団が「戦術オーブメント」を発展させた新武装として開発している武器。『零の軌跡』の時点では、クロスベル自治州にてティオ・プラトーにより実戦テストが行われている。本作では、エリオット・クレイグが武器として使用。ただし、「汎用」とあるので、ティオが持っていたものとは性能に違いがありそうだ。また、所持する者の能力に依存する「エイオンシステム」も、組み込まれていない可能性が高い。エリオットの解説にエプスタイン財団の技術を取り入れたとあるが、これはラインフォルト社が研究・開発の協力を行っていたのか、それとも……？



**■八葉一刀流**

剣術の流派で、当主はユン・カーファイ。ユンはかつて《剣聖》カシウス・ブライトにこの剣術を教えたことがあり、《風の剣聖》アリオス・マクレインは弟子にあたる。また彼は、遊撃士のアネラス・エルフィードの祖父であり、彼女に自身の技を伝授。なお、カシウスはこの剣術を、アラン・リシャールやマクシミリアン・シードなど、部下たちにも教えている。



# ぶらり帝国旅

## トールズ士官学院のあるトリスタを訪れてみよう

『軌跡』シリーズは、街や村ごとで建造物の見た目や雰囲気が変わるなど、背景も凝っているのが特徴。第一報で写真が掲載されたトリスタの街なかの様子から、本作でもどれだけ建物などが作り込まれているか見てみよう。






**オープンカフェ**

←リベール王国のロレントを連想させる広場のカフェ。のどかな雰囲気が伝わってくる。

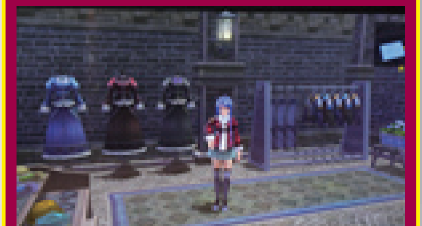
**ラジオステーション**

→帝国の技術が端的にわかる場所。建物内部には、ブースもしっかり作られている。ラジオ放送もあり？






### 今月のこの1枚　ブティックで衣装チェンジが可能？



トリスタの街のなかには、ブティックも存在した！フティックといえば、『零の軌跡』でロイドたちがパーティーに出席するために正装をするというシーンがあったが……？　キャラがポリゴンになった本作では、コスチュームチェンジなどもできるかも！

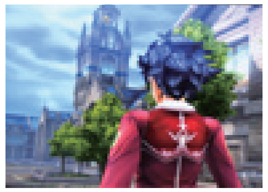
### CHECK! 設定画と画面写真を見比べてみよう!

ここでは実際の画面写真と設定画を比べて、どう再現されているのかをチェックしてみた！

**トールズ士官学院**

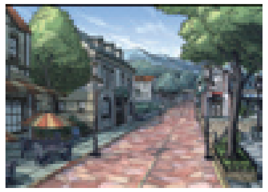
厳密には設定画とは同じではないけれども、同じような角度で学院を見てみた。塔がかなり高いことがわかる。





**トリスタ**

トリスタの広場から、トールズ士官学院が見える通り。設定画を忠実に再現していることがわかるカットだ。





「レーヴェ物語」完結&単行本第3巻発売記念

# よりぬきレーヴェさん(嘘)

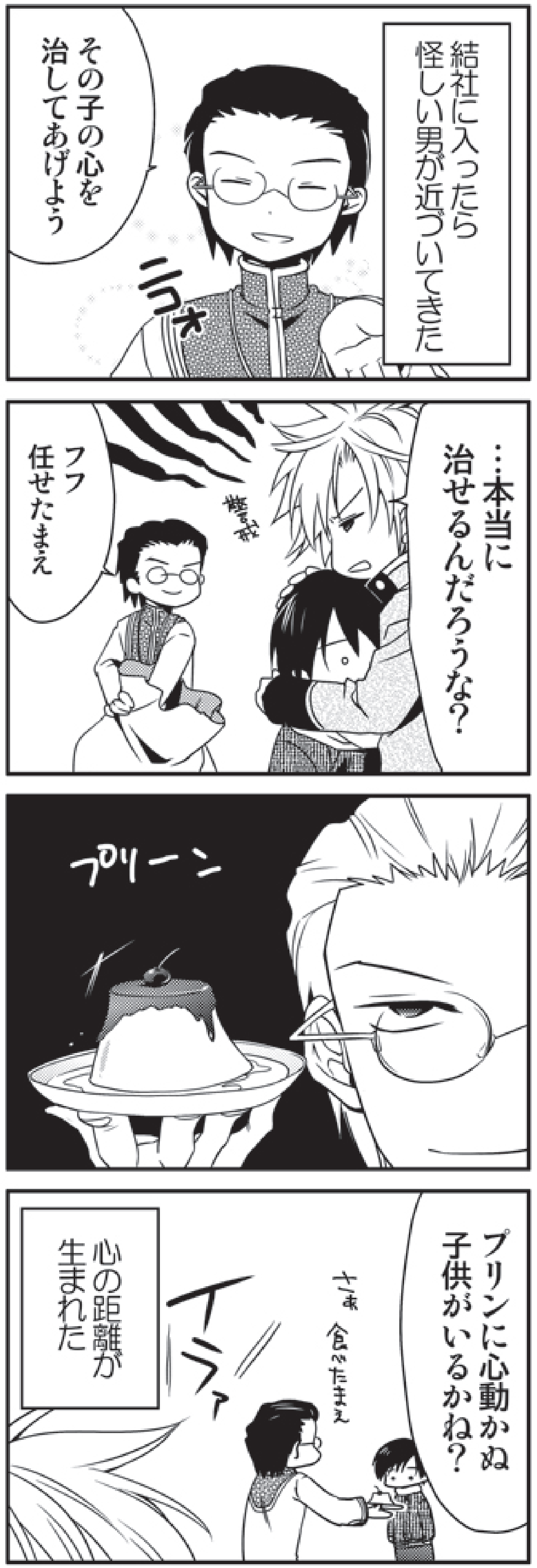
楽時たらひ




( ´;ω;`)



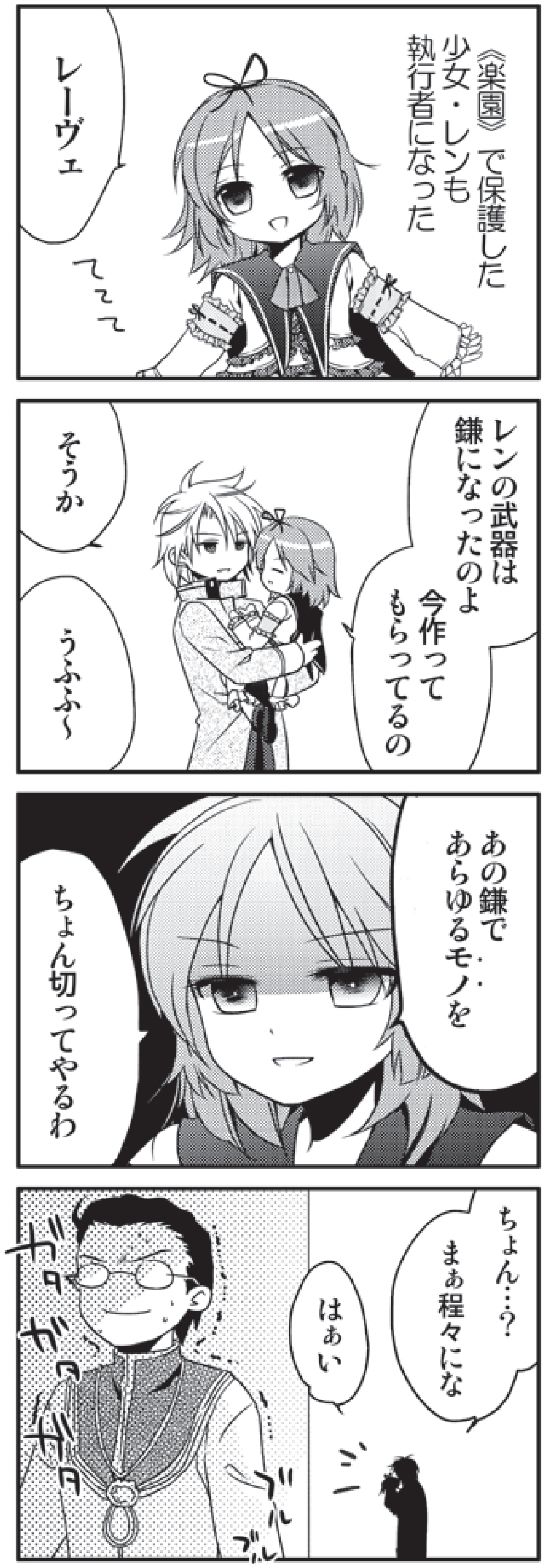

(#^ω^)




(#・∀・)



## (((゜ω゜)))



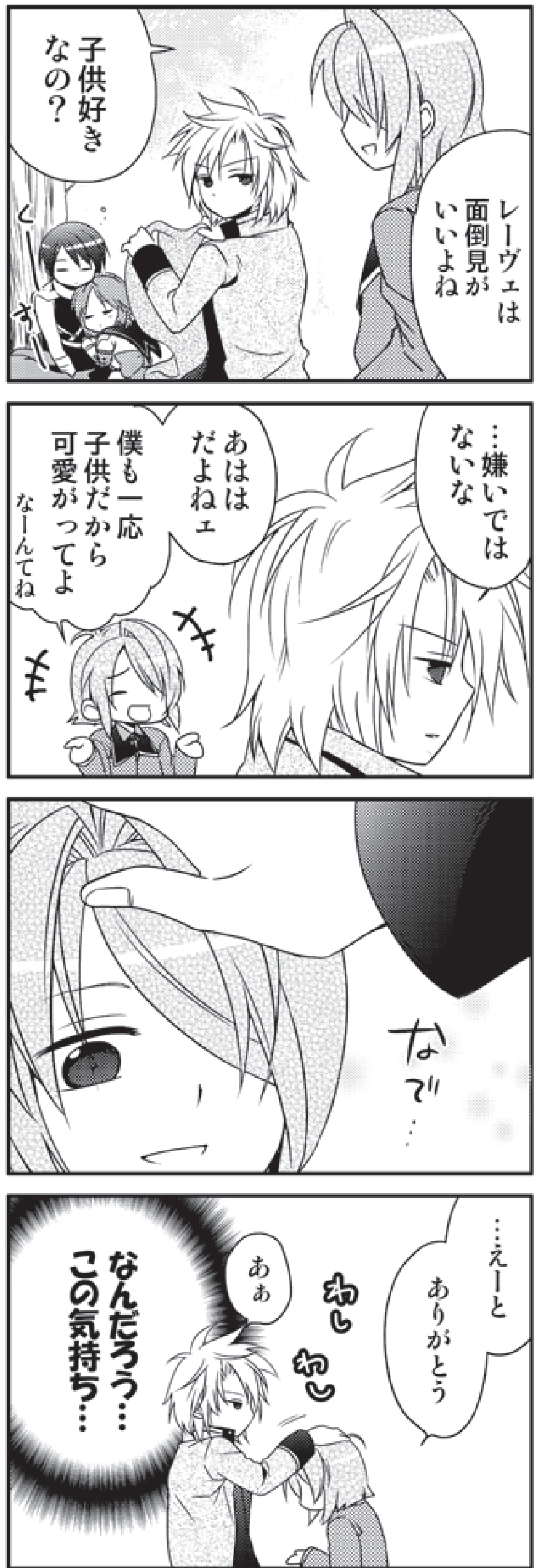

## (゜д゜)



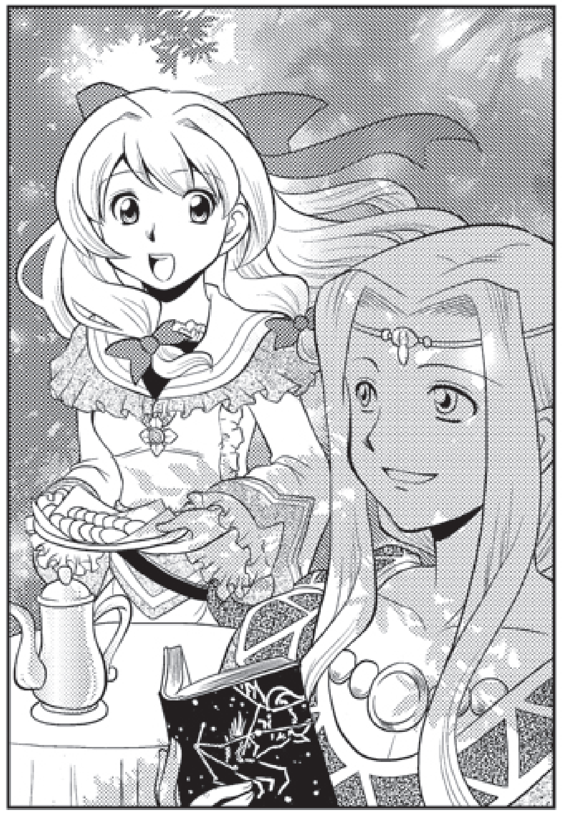

## (¯;ω;¯)




## (*´ω`*)




『空の軌跡外伝 レーヴェ物語』第3巻　3月7日（木）発売！！



# みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

## 兄の常識




## 太陽の神殿




## 臨時収入



## トラップ




## さすがオズマ




## 屈 辱




## 困った時の…



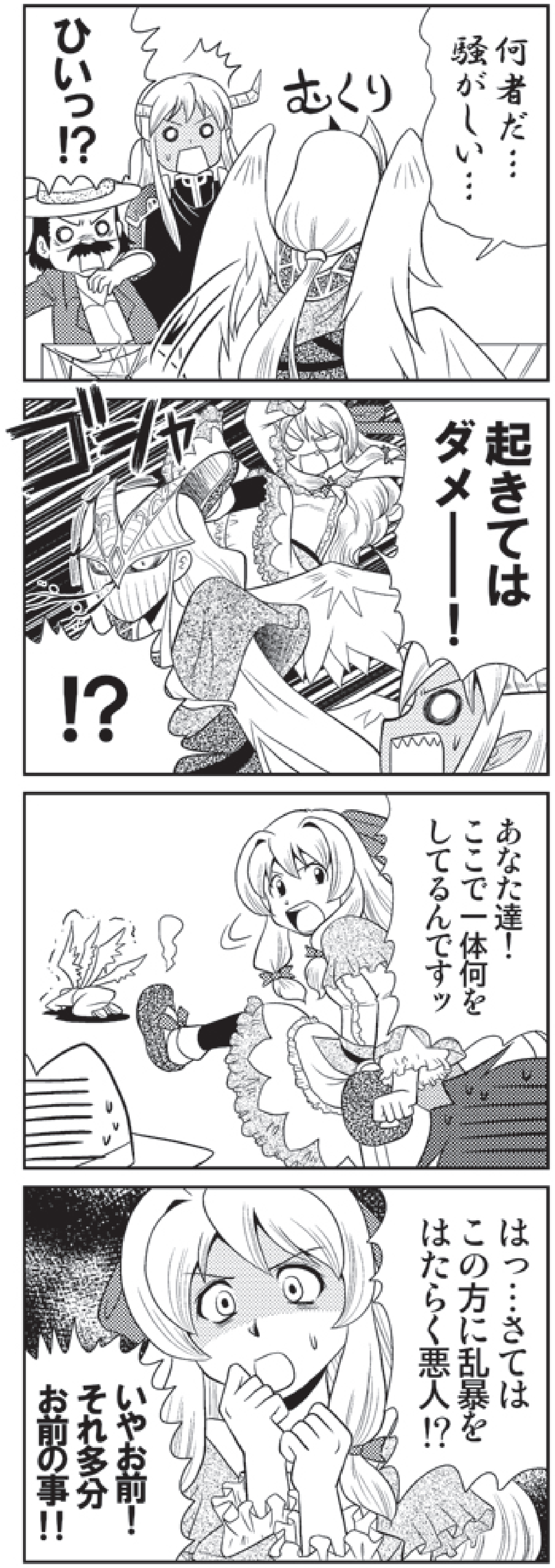
## 発掘品




## 見事な仮面




## 少女と悪人




## お兄ちゃんの結論



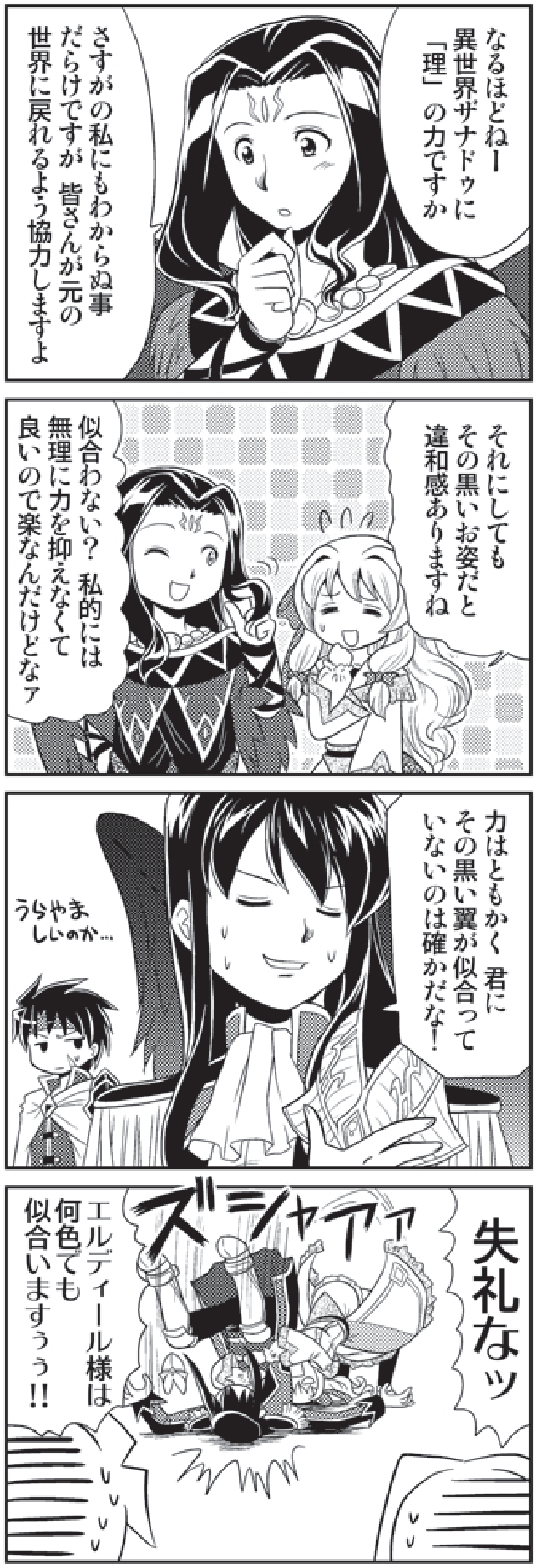
## あの方のしずめかた



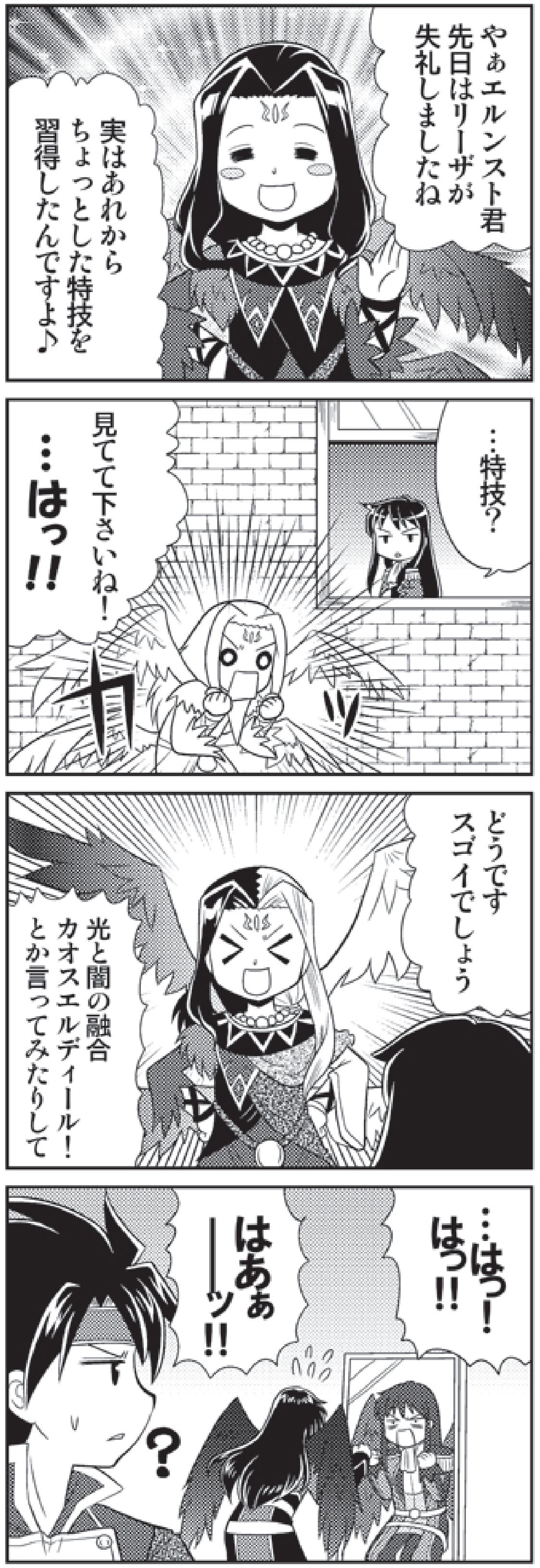

## 「理」と黒い翼

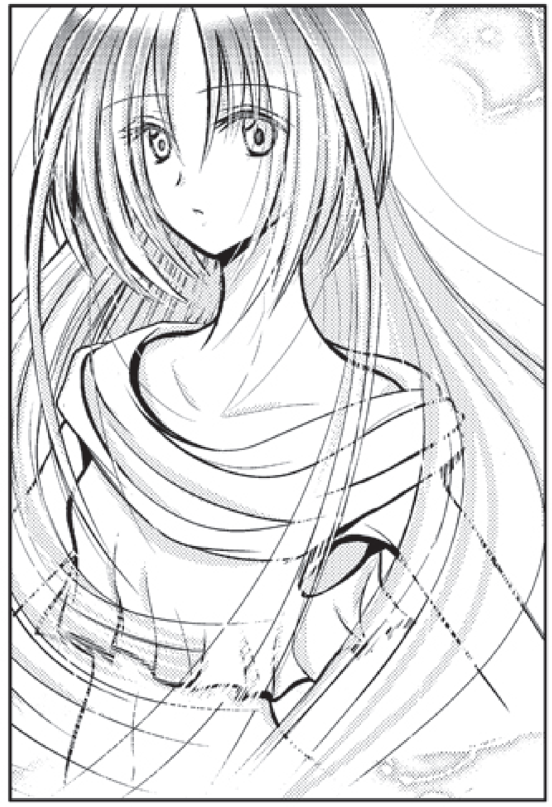



## どっちやねん




## 羨望のお兄ちゃん





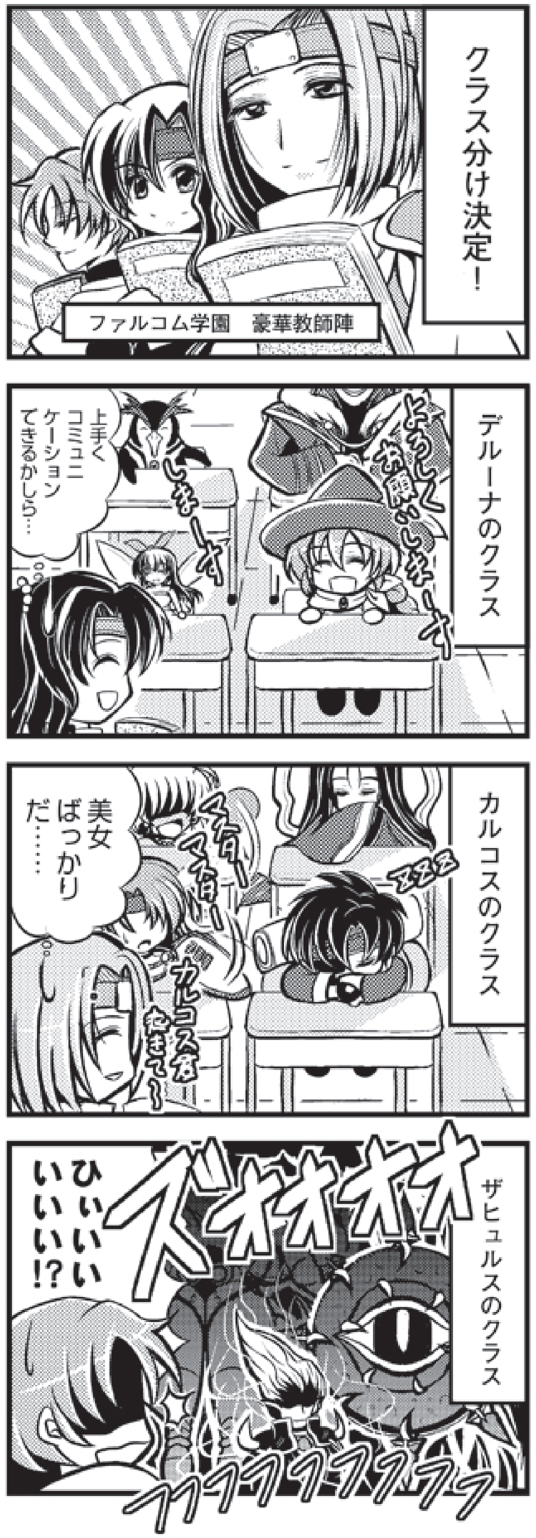
# ヴァンテージマスターがやってきた！

春過なつき

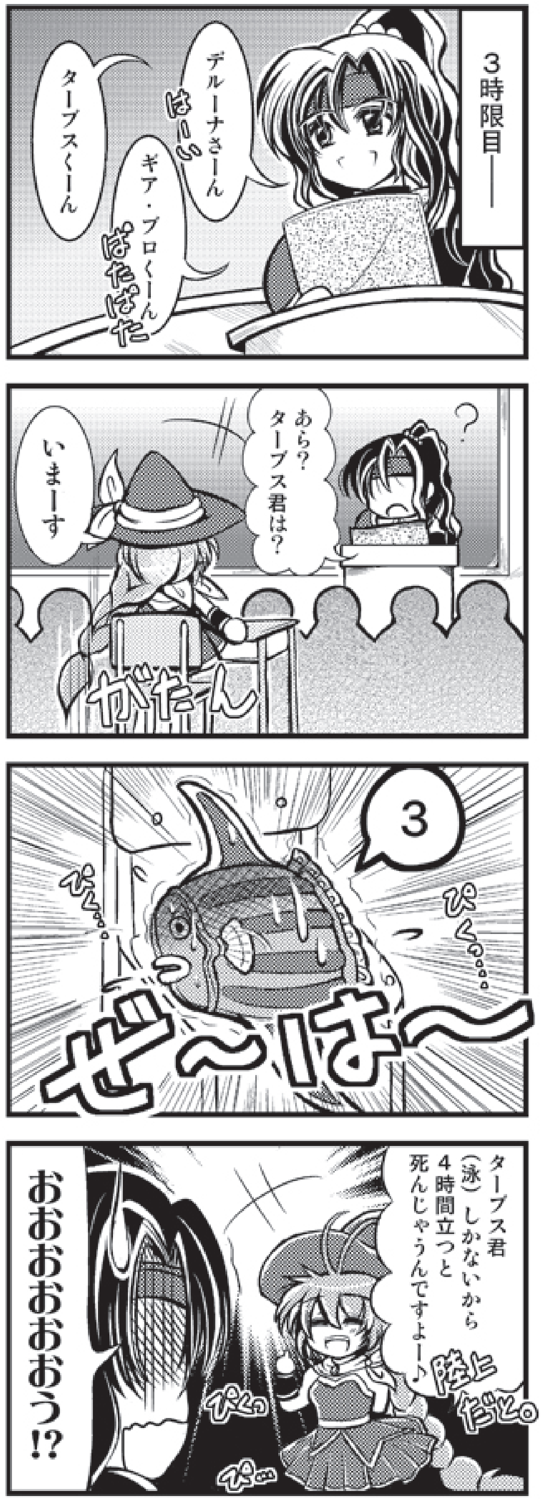
## そして新たなる道へ




## いざない




## 瞬きを見上げて



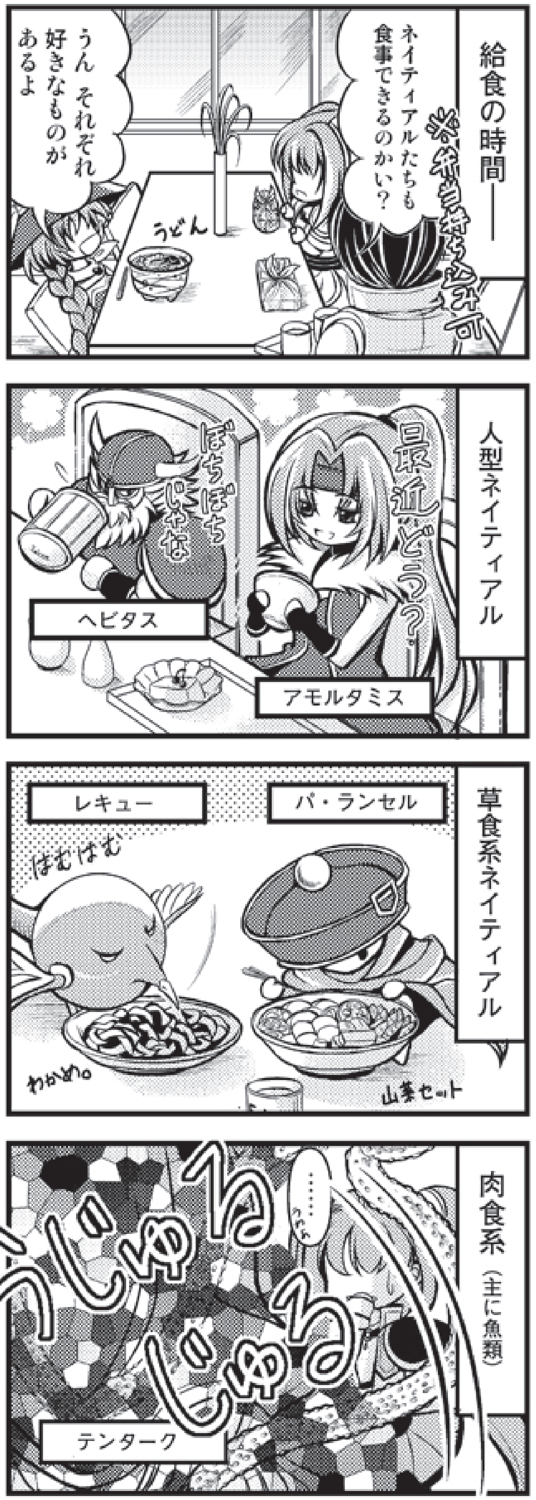
## 純粋なる者たち



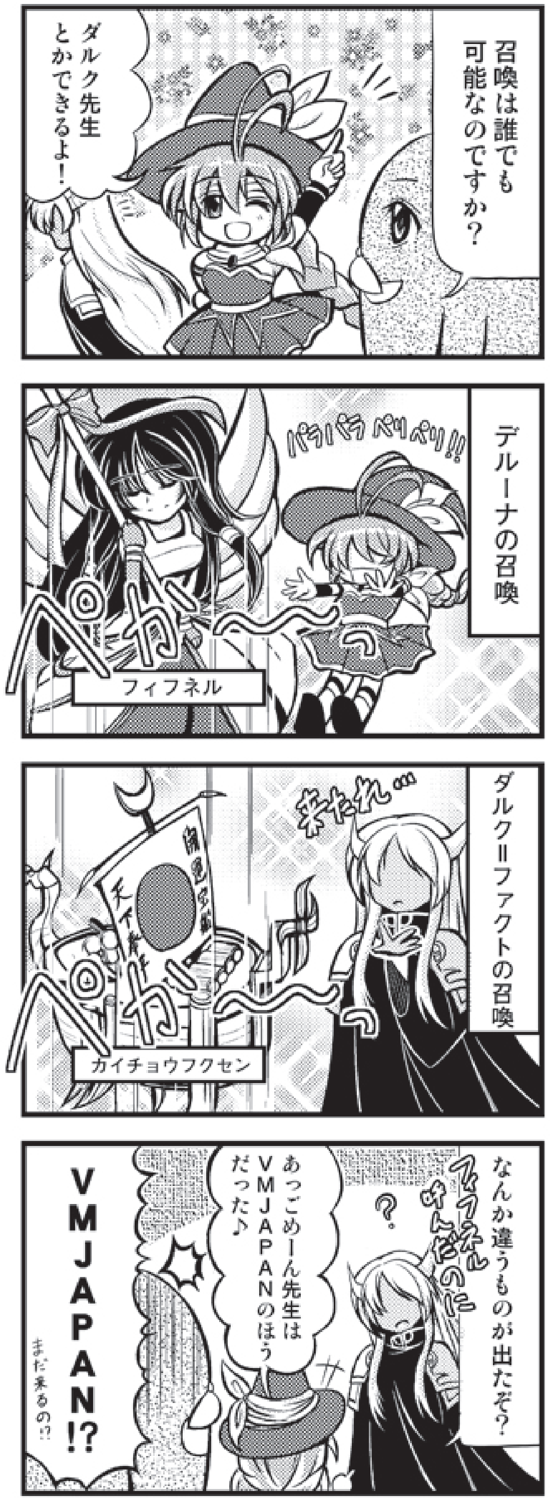

## 開闢の時

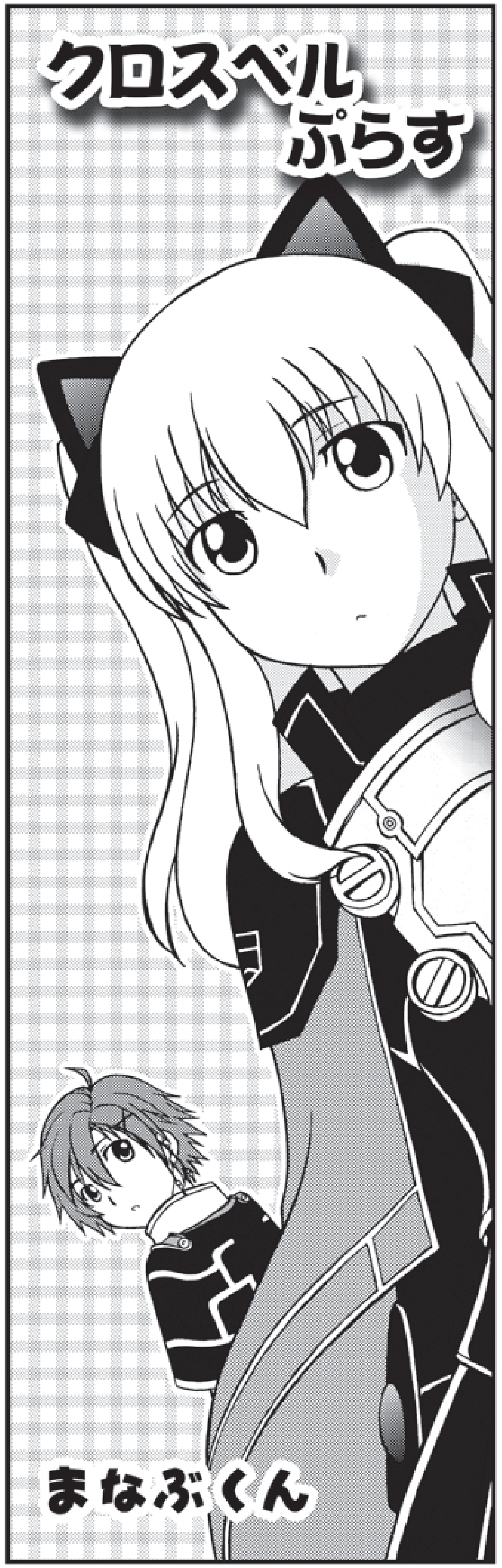



## 危険な予感




## そして新たなる道へ(V2)

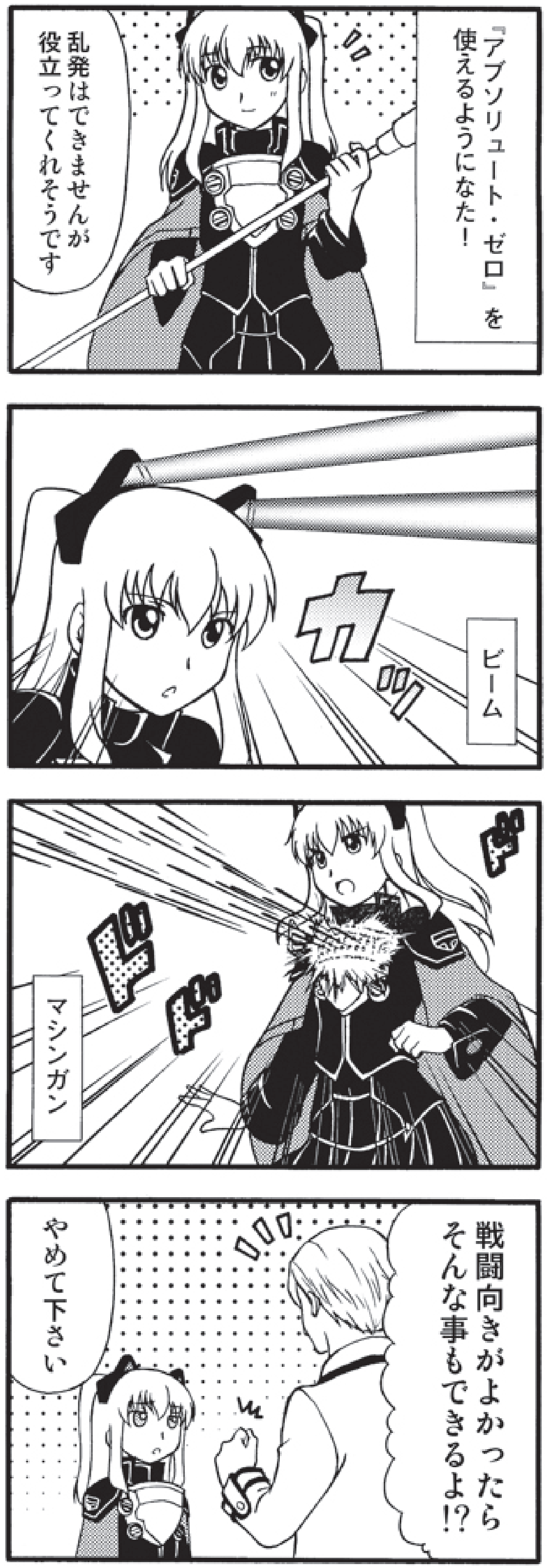





## 便利機能




## 戦闘機能



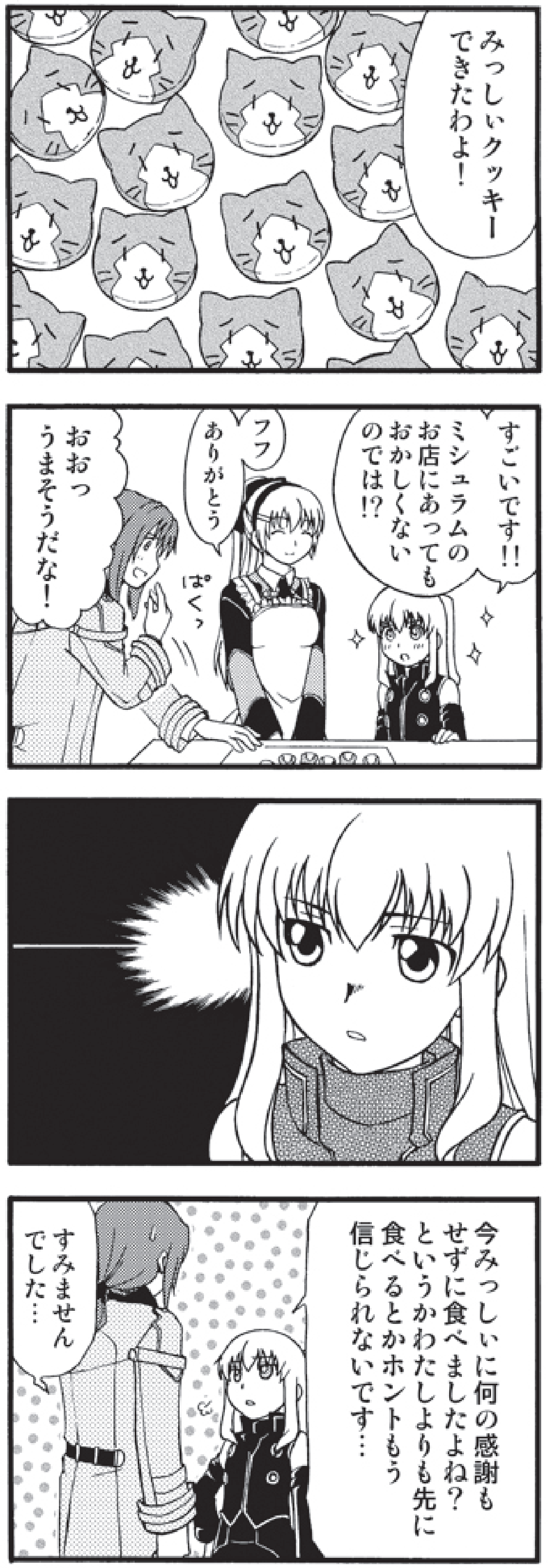

## ヨアヒム先生の涙



## 画面の向こう




## いただきます




## なんとか男爵的な




## 衝撃の事実



# 英雄伝説 空の軌跡
## ～リベール王国スナップショット～

著：はせがわみやび

## 第8回『ラッセル博士の発明品』（後編）

7.

中央工房三階、設計室。

技師フーゴの証言。

「ここんところは、毎日のように午後のこの時間になると設計室に来てたんだよ」

フーゴは蓋を開けた猫缶を手にまくしたてた。

「この猫缶がお気に入りらしくてさ。あいつ、頭のいい奴だから、まだ残ってるの分かってるはずだし。食べに来ないなんておかしいなって」

フーゴは、中央工房に務める技師だ。日夜、新型エンジンの設計で頭を悩ましている。

だが、今この時だけは彼の悩みはアントワーヌの所在だった。

アントワーヌが猫缶を食べに来ないなんて。

そんなことはこの三日間なかったことなのだ。心配でしかたがない。フーゴの表情がそう語っていた。猫のアントワーヌが、この工房でいかに愛されているかをナイアルは垣間見た気がした。

アントワーヌ失踪す――。

そのニュースは、またたく間に中央工房全体に広がり、上を下への大騒ぎになってしまい、ナイアルたちも捜索に手を貸すことになった。

ティータも含め、工房のみながアントワーヌ探しに出向いてしまうのであれば、取材も棚上げするしかない。

「しかし、猫一匹なんて、どこに潜り込んでてもおかしくねえぞ」

「でも、頭のいい子ですから、そんな変な場所には行かないと思うんです」

ナイアルのつぶやきにティータが応えた。

地下一階から、フーゴのいる三階へと上がったナイアルたち――ナイアルとドロシーとティータは、そのままひとつ上の四階へと探索の網を広げる。

「なんで、突然いなくなってしまったんでしょう？」

ドロシーの疑問に対する答えは、四階、医務室のミリアムが持っていた。

「すねちゃったかなぁ」

「すねた？」

「さっき、わたしがポンテ……ポンテーヌばっかりを構ってたから」

ナイアルの挟んだ問いかけに、わざわざ言い直してくれる。

あの導力で動く犬もどき機械人形のことか、とナイアルは理解する。

「あー」

ドロシーが納得した顔になった。

「ヤキモチ焼いちゃったんですねー」

「猫がか？」

「猫さんだって、焼きもちやきますよー」

「そんなもんかね」

「センパイは人に構われようが嫌われようが気にしない人ですからねー。よくも悪くも。ここーの人ってやつですよぅ」

「ここー？　……ああ、孤高か」

「それです」

まあ、新聞記者なんてやってると、どうしてもそうなりがちだ、とナイアルは心の中で思う。嫌われることを恐れていては真実は書けない。

「っと、そんな話は今はいいんだ。どうするよ。このまま闇雲に探すのか？　なんか心当たりとかないのかよ」

「暑い季節だと涼しい処に、寒い季節だと温かい処にいますよね、猫さんって」

「そういえば、冬だとたまに《カペル》の上で寝てたりします」

ティータが言った。

「高速処理中の《カペル》ってけっこうな熱を出すんです。だから……」

ツァイスが誇る高性能演算処理装置も、猫にとっては暖炉の代わりらしかった。

まあ、《カペル》が酷使されることなんて、この前の黒のオーブメント事件のような事でもない限りはそうそう起きないはずだ。たいていの演算は朝飯前らしいから。

ん？　――何か引っかかったぞ。

「ベランダで寝てるほうが多いですけど」

「だろうな。それに、今は暑くも寒くもねえし」

「なるほど。では――わかりましたよ、センパイ！　暑くも寒くもないのならば、アントワーヌはちょうど良い所にいるんです！」

ドロシー名探偵がえっへんと自信たっぷりに胸を張る。

「じゃあ、そのちょうど良い所ってどこだ？」

「それがわかれば見つかってるのでは？」

しれっと返された。

「おい……殴っていいか？」

ナイアルは丸めたメモ帳で叩くふりをする。

本気で叩いても痛くはないはずだが、ティータが怯えそうだ。かといってボケに突っ込まないでいられる性分でもなかった。

「冗談はさておいてですねー」

「おまえが言うと冗談に聞こえないんだよ……」

「あと探してない所は？」

「この四階の実験室と五階だけです」

中央工房は地下一階、地上五階だ。

「上まで行って見つからないときは、また戻って探すしかないです。どうしよう……」

ティータが眉根を寄せて考え込んでいる。

探している他の職員からもまだ発見の連絡はなかった。捜索を始めてそろそろ一時間になる。

ナイアルは先ほどから何かが引っかかっていた。

さっき、ふと思いついたことがあるのだ。だが、ドロシーのボケに突っ込んでいる間に、霞となってそのアイデアは消えてしまった。

「なあ、ドロシー、もう一回ボケてくれないか？」

「は？」

「今さっき、何か思いついたんだがな。おまえがボケてくれたせいで、そのアイデアが吹っ飛んだんだよ。もう一度やってくれれば思い出すかもしれん」

「センパイ……何を馬鹿なことをおっしゃるんですか」

「おう。俺が悪いってのか」

「はい。わたし、生まれてこのかた、ボケたことなどありませんよぅ」

「ありがとう。ナイスボケだ」

「だから、ボケてませんってば」

「わかったわかった。おまえはボケてない。天然なだけだよな」



ドロシーがぷっと膨れっ面になった。不満そうだ。脇に立っているティータが困った顔のまま額に汗を流し、ミリアム先生が苦笑を浮かべている。

――しかし漫才やってる場合じゃねえな。

「思い出しましたか？」

「いやぜんぜん」

「忘れないためにメモ帳を持っているのでは？」

「うぐ」

正論だ。まさかドロシーに諭されるとは。だが、ナイアルにも反論はある。メモを取るためにはそれなりの時間が必要だ。風景に限るとはいえ、一度見れば忘れない、というドロシーの記憶力が尋常ではないのだ。

ふつうの人間は機械ではないから、そこまですべてを覚えていられない。

――待て、今何か引っかかったぞ。

「機械……そう、あの犬だ。《カペル》の脳……高速演算処理の脳との組み合わせ……確か言ってたよな。『人間の何倍もの嗅覚や聴覚を持たせてある』って」

## 8.

がしょん、がしょん、がしょん、がしょん。

機械音を立てて導力犬ポンテーヌが廊下を歩いている。時折り立ち止まると、左右に首を振ってからまた歩き出す。

「あれで臭いを追っているんです」

ティータが言った。

「なるほど」

「犬の嗅覚は人間の一億倍って言われてます。臭いの種類にもよるんですけど。ポンテーヌも、同じくらいは可能だって、おじいちゃんは言ってました」

「一億……想像もつかねえな」

「えーと。わかりやすく言うとですね。靴下の臭いを覚えさせれば、その靴下を一億個に切り裂いた欠片のひとつでも残っていれば後を追えるということだ――って、おじいちゃんが」

「その例えはわかりにくすぎる！」

――一億個に切り裂いた靴下とか想像できねえし。

まあ高性能であることだけは理解できるけれど。

「でも、さすがはナイアル先輩です！　ポンテーヌに、アントワーヌの後を追わせるなんて、よく思いつきましたねー」

ドロシーが言った。

「おまえがボケなけりゃ、もっと早く思いだせたんだがな」

猟犬の代わりもできる、というティータの説明が頭の隅に引っかかっていた。

行方不明の猫を探すのに役立つかもしれないと思ったわけだ。

ミリアム先生にポンテーヌを再び引っ張り出してもらい、アントワーヌを追わせることにした。

アントワーヌがいつもじゃれているというぬいぐるみを嗅がせて臭いを覚えさせ、ナイアルたちが最後にアントワーヌを見たこの医務室から後を追わせてみた。

事前にプログラムされていれば、訓練なしに実行できるのが機械のいいところだ。融通は利かないが。

四階の医務室からスタート。廊下を歩いて左へと曲がり実験室へ。いつもならそこに立ち寄るのだというが、ポンテーヌは見向きもせずにさらに歩いてゆく。

「やっぱりすねてたんでしょうか」

「かもな」

がしょん、がしょん、がしょん。細い廊下をポンテーヌは突き進む。

扉の前で止まった。

動かない。

げしょしょしょ、と鳴いてから、しん、と静かになる。

「追って……いるんだよな？」

「はい。たぶん」

ティータが申し訳なさそうに言った。

「動かなくなった機械は蹴ってみろって、編集長が前に言ってましたですよぅ」

ぴこーんという音とともに、目にあたるライトが赤と青に目まぐるしく点滅した。

ぎゃぎゃぎゃ！　と叫ぶ。

「ドロシー、おまえな、不要に怯えさせるなよ」

「編集長が言ったんですってば」

「わかったわかった。……ティータ、どうして動かなくなったんだ？」

ポンテーヌを抱き上げて、ためつすがめつしていたティータに聞いてみた。

「故障じゃないみたいです……けど……あっ！」

わかりました、と言ってから犬を下ろし、正面に立ちはだかる扉を開けた。

扉の向こうは階段になっていた。

利用する者が少ないと言われる地下から五階までを結ぶ階段だ。なるほどとナイアルは思う。見つからないのはこの階段に来たからかもしれない。

ふたたびポンテーヌが歩き始める。

「なんだ。扉が開けられなかっただけかよ」

「取っ手に前足が届きませんもんねー」

「届いても無理だろ」



「いえ――」

ティータが言った。

「それはできます。おじいちゃんのプログラムした二五六通りの動きの中に確かあったはず」

後ろ足で立ち上がったポンテーヌが、両前足で扉のノブを回しているシュールな光景が頭に浮かんだ。

「なんでそんな動きだけ器用なんだよっ！」

「おじいちゃんが『役に立つから』って」

「愛玩動物犬にいらねえよな、そこ！　明らかに！」

ティータが首をすくめた。

そんなティータをかばうようにドロシーが抱きかかえる。

「センパイ、こんなかわいい小さな子を怯えさせちゃだめですよぅ」

「あのな……」

――頭、痛ぇな。

ポンテーヌは上下に続く階段のうち、昇り階段のほうへと歩いていって、階段の一番下で止まった。

今度はナイアルにも理由がわかる。

「昇れねえんだな」

「ですねー」

導力犬の短い脚では段差を昇れないのだ。

同時にナイアルは気づいた。ポンテーヌは上を目指している。だが、缶詰を抱えてポンテーヌを待っていたフーゴは三階の設計室の住人だ。

「けど、今日は三階に降りなかったわけだな」

「上に用があったんでしょうか」

ドロシーが言って、ナイアルが「どんな用だよ」と突っ込んだ。

そのときナイアルは気づくべきだった。

ナイアル自身が言った言葉なのだ。

ポンテーヌには扉が開けられなかった。ならばアントワーヌには可能なのか。

そんなはずはない、と。

五階へと辿りつき、再び扉を開けて廊下へと出る。

リベール王国一の演算装置《カペル》のある部屋――演算室から、黒尽くめの男が廊下へと飛び出してくるところに出くわした。男の腕の中には激しく暴れる猫が一匹抱えられていて、扉の奥からは「ドロボーだー！」と叫ぶ職員の声が聞こえた。

## 9.

ティータがとっさに叫ぶ。

「ポンテーヌ、攻撃(ゴー)！」

階段を昇るために抱えていたドロシーの腕の中からポンテーヌが飛びだした。
そのまま黒尽くめの男へと向かってゆく。
ガウウ！
と唸って噛みつこうと飛びかかる。
男の脚にぶつかって、そのまま床に落ちた。
「大変です、先輩！　口が無いから噛みつけません！」
「見りゃわかるよ！」
だが、ポンテーヌは健気にも床に叩きつけられても再度飛びかかっていった。
今度は前足の爪を思い切り伸ばして引っ掻きにかかったのだ。
爪が男のズボンを切り裂き悲鳴をあげさせる。
その間、ナイアルも黙って見ていたわけではない。
「おいこら、ちょっと待て！」
男の元へと走り、捕まえようと手を伸ばす。だが手は空を切った。
黒尽くめの男は、五階の南側にある扉を開いて外へと出る。
そこはベランダになっているのだ。
脚にポンテーヌを絡みつかせたまま男はベランダに出て、そこで立ち往生した。
「残念だったな――」

ベランダは幅にして二アージュもない狭い張り出しだった。遥か向こうにツァイスの街並みが見てとれるし、真下で営業している大きな屋台が、ドロシーの持っているカメラくらいの小ささに見えてしまう高さだ。
「ここは五階だ。うっかり落ちたら助からねえぜ？　逃げられねえんだから観念しろって。ほら――」
大勢の足音が近づいてくるのが聞こえる。
「みなさんも、お揃いだ」
くそっ、と叫ぶながら男は脚を振り回して爪を立てていたポンテーヌを振りほどいた。
がしゃん！
嫌な音を立ててナイアルのいた扉のすぐ脇の壁にぶつかり
――落ちた。
首を一度だけ持ち上げてポンテーヌがアントワーヌのほうを見る。
目の光が消えた。
「ポンテーヌ！」
ティータが叫んだ。
「往生際が悪いぞ！」
「ひどいです！」
ドロシーが涙声になって言った。
「にゃぁお～～ん！！！」



ナイアルたちに負けじと叫んだのはアントワーヌだった。最大級の警戒を声で表現しながら、男の腕に噛みつき引っ掻いた。
うわぁあと叫び、抱えていた男はたまらずにアントワーヌを放り出す。
――今だ！
ナイアルは飛びかかった。
男が出してきた右の拳がナイアルの頬をかすめる。ぴっと肌の裂ける音が耳に聞こえ、頬に刺すような痛みを感じたが、勢いを止めずに身体ごとぶつかった。
そのまま押し倒して、相手にのしかかりながら、顎に肘を叩きこんだ。
うめき声をあげて、男が顔をのけ反らせる。
肩を押さえつけ、動きを封じているうちに、どやどやとベランダに飛び出てきた工房の職員たちが男の手と足を抑えて無力化させた。
それを確認してからナイアルは男から離れる。
「先輩、血が！」
頬から流れた血が口許まで垂れてくる。舐めると、錆びた鉄の味がした。
「この野郎……手袋の中になんか仕込んでやがった」
ドロシーが心配そうな顔をするので、ナイアルは無理をして微笑む。
「かすり傷だ。舐めときゃ治る」
「ナイアルさん。あの、これ使ってください……」
ティータがハンカチを差し出してくる。わりぃな、と言いつつ遠慮なく使わせてもらった。傷を見せたままだとドロシーが心配し続けるだろうから。幸い、この工房には保健室もあるから止血だけして後で見てもらえばいい。
血で汚れたハンカチは洗ったくらいじゃ落ちないので、ティータには買い直さないとダメだろうが。
捕まった男はそのまま工房の警備員に引き渡された。
「しかし、泥棒とはね……」
「《カペル》から機密情報を盗み出そうとしたようです」
先ほど、泥棒だと叫んだ男が言った。演算室に務めているトランスという名の主任だそうだ。
「あまり賢い奴ではなかったようですが」
「そうだな」
ナイアルも同意する。
《カペル》の端末から重要な情報を引き出すにはパスワードが必要だし、昼夜を問わず演算室から人がいなくなることはないので、結局は盗みもできずに、こうしてあっさりと追い詰められてしまったわけで。
「中央工房で働く人全員を建物から追い出すくらいの工夫を

しないとね」
　トランス主任が言った。
　すこし口調が苦々しげなのは、それを実行した奴らがちょっと前にいたからだろう。
　比べて、今回のヤツが小物の泥棒であることは確かだ。
　受付の目をどうにか誤魔化して工房の中に入り込み、人けのない階段を上下して忍んでいたところまでは上手かったが、四階をふらついているところを、アントワーヌに見つかり、関心を引き付けてしまったわけだ。
　——っと、そうだ。そのアントワーヌはどしたよ。
　首を巡らせて、ナイアルはげっと呻く。
　事態が悪化している。
「なんでまたそんなところに……」
　行方不明をやっと見つけたと思ったら——。
　猫は壁から突き出した煙突の傘の上にいた。
　男の手から逃れようとしたアントワーヌは、ベランダから外へと飛び移ったのだ。
　煙突は二本あり、上に円錐形の傘が取り付けてある。傘は、おそらく雨が煙突の中に入らないようにだろう。煙は傘と円筒の隙間から出てくるようになっていた。
　そのふたつの傘のうち、大きな傘の上にアントワーヌは飛び乗ったのだ。
　だが、逃げたのはいいが戻ってこれなくなっていた。
「みゃ～う！」
　アントワーヌが鳴いている。
　滑りやすそうな斜めの傘の上に必死に爪を立ててしがみついていて、ティータが驚かさないように優しい声で呼びかけているが掴まるのに精一杯だった。
　例え猫でも、この高さから落ちたら無事では済まない。
「先輩っ、あれじゃ、そんなにもたないですよぅ！」
「わ、わかってる！」
　だが——どうしたらいい？

## 10.

　壁から煙突までは一アージュほど。
　飛べない距離ではないが、むろん落ちたら助からない。五階の高さがあるのだ。
　見下ろせば煙突管は三アージュほど下で壁と繋がっていて、Lの字型に折れてベランダの高さまで伸びてきている。
　トランス主任が煙突工に連絡を入れたものの、到着するまでアントワーヌが持つかどうか……。
　それで助かるものかはわからないが、落下しそうなところにクッションを敷く準備は進められている。

「梯子を渡してはどうでしょう？　ここだったらいくらでもあるのでは？」
　ドロシーが珍しくまともな提案を出してきた。だが——。
　相手が人間ならそれでいいだろうが……。
「猫だぞ？　下手に梯子を掛けたら、驚いて身をすくませた時点で落ちねえか？」
「あ……そうですね……」
　しょぼんとうな垂れてしまう。
　ドロシーとは思えない。
　ナイアルは無意識にドロシーの頭を掴んで、髪の毛をわしゃわしゃさせていた。
「ちょ、ちょっとセンパイ！　髪が痛いですー」
「だが、アイデアはいい」
「あ、はい」
　思いがけずに誉められて、にへらっとドロシーの眼鏡の奥の目が弛む。すぐに真剣な目つきに戻ってしまったが。
「いちおう梯子は用意すべきだな。で、もうちょい何か思いつかねえか？」
「はあ」
　そうですねえ、と腕を組んで唸り始めた。
　ティータはその間も、アントワーヌがパニックして落ちないように声を掛けていた。
「あの……」
　声に振り返る。
　保健室のミリアム先生がいた。腕に、動かなくなった導力犬を抱えている。目の光が消えた導力犬を撫でていた。
「すみません。部外者の方にまでお手伝いしていただいてしまって。お怪我の具合を見ますから、どうぞ保健室のほうへ」
「どうせ乗りかかった船ですからね。あの猫が助かってからでいいです。そいつ……やっぱり壊れちまったんですか」
「そうみたい。でも心配しないで。この子の頭の中は《カペル》だから、ラッセル博士に身体のほうさえ直してもらえば元通りになると思う」
「ああ……そいつは」
　良かった、とは簡単には言えないナイアルだ。安易に「直せばいい」なんて言うもんじゃない。例え生きていなくても、壊れることに悲しみを感じる人の心はそれでは癒されないものなのだ。
「そうね……」
「頑張ってくれたよ。さすがはラッセル博士の発明品だ」
　ポンテーヌを撫でながらミリアム女医が目を細めて微笑みながら頷いた。
「それです！」
　ドロシーが叫んだ。

心臓が止まるかと思った。

「み、耳元でいきなり怒鳴るんじゃねえ！」

「それですよ、センパイ！　発明品の中に役立ちそうなもの何かないでしょーか。遠くのものを掴める機械とか。空を飛べる機械とか」

「は？　……ああ、なる」

そうか。ラッセル博士の発明品か。

ドロシーのアイデアをその場にいた主任に話すと、トランス主任はすぐに地下の在庫管理担当のフェイへと連絡を入れてくれた。フェイは登録データベースにアクセス。目録のアブストラクトを検索すると、ものの五分でラッセル博士の発明品の中から役立ちそうな品を突き止めみせた。

その足で荷を持って五階まで駆け上がってくる。

扉の向こうにいる大勢のアントワーヌを心配する職員たちを掻き分けて、フェイが姿を見せる。

荷箱を下ろして、発明品を取り出した。

「そいつは？」

「個人用空中浮遊器です」

フェイが言った。

「空中――」「――浮遊器？」

ナイアルとドロシーが機械を見て首を傾げた。なんだそれ？

「ティーちゃん、説明してくれる？」

ドロシーに呼ばれ、アントワーヌを落ち着かせる役をミリアムに譲って、ティータがナイアルたちの元へとやってくる。

「あ、《ジェッター三号》ですね……！」

ナイアルは、ティータが一瞬だけ眉をひそめたのを見逃さなかった。

「こいつはどうやって使うんだ？」

その機械は見た目は腰に巻くベルトだった。ただ、腰の左右にあたるところにずんぐりとした巨大などんぐりみたいなものが付いている。

ティータがこぶし三個分ほどの大きさの機械のどんぐりを指さして、

「これがジェットって言われる部分なんです。この開いた口から空気を強く噴き出して空に浮かぶことができます」

なるほど、となんとなく納得する。腰に巻いて自分が飛行船になる機械だと思えばいいわけか。

山のようにある発明品から、求める概要を聞いただけでこれを引き当ててくるフェイの検索能力の確かさに舌を巻く。さすがは中央工房の在庫管理担当。確かに今必要なのはこれかもしれない。

「オーバルエンジンなのか？」

「はい。ジェットの部分に使われているのは、飛行船に使われているエンジンと原理的には同じものです」

ナイアルは目を瞠った。

ここまで小さいくせに人ひとりを空に飛ばすことができるのかと驚いたのだ。

「そういや、最近『ひとり用の小型飛行艇』が開発されたとか、されそうだとかどこかで聞いた覚えがあるが……」

「あ、それは多分おかあさんの発明です」

さらっとティータが言って、ナイアルは今度こそ本当に驚いた。なんて一家だ。

「で、おじいちゃん、あいつと同じことをやるのは好かん、って」

「それがお蔵入りの理由かよ……」

複雑な家庭事情……なのか。それとも頑固者一家ということなのか。

もったいねえな、とは正直なナイアルの感想である。

待てよ、と同時に思う。それだけが理由ならば、これはラッセル博士の発明品の中でもまともである可能性があるのだが……。

「ジェットの部分はベルトとこんな風に色々角度を変えられるようになっています。浮くだけなら、四つくらいを固定で噴射させれば簡単なんですけど、それだと空に向かってどこまでも飛んでいくだけになっちゃいますから」

言いながら、大きなどんぐりを様々な角度に傾けてみせる。

「この噴射角はこっちのコントローラーで動かせます。遠隔制御（リモートコントロール）……いわゆるリモコンですね」

ティータが手にしたのは、弁当箱半分ほどの大きさのリモコンだった。

左と右にぐりぐりと動かせるスティックが付いている。それで左右にジェットを制御するのだろう。

ナイアルは最も肝心な点を聞くことにした。ティータが眉をひそめたのが気になる。

「で、こいつの問題点は何だ？」

う、と一瞬だけティータが口をつぐむ。

ナイアルの内心で汗が流れた――やっぱり只じゃ済まねえか。だが、もう時間がないのも確かだった。アントワーヌの鳴き声がさっきから小さくなっている。段々しがみついているのが難しくなっているのだ。

空中浮遊器。その名の通りの発明品ならばこいつで助けに行ける。

壁から一アージュの距離だけ浮ければよしなのだ。もしものための命綱だって付けられるだろう。ナイアルは言い出した自分がやる気だった。うまくいけば、こいつは記事になる、というジャーナリスト根性があったことも否定はしない。

「ジェッター一号と二号はお星さまになったんです……」

ちょっと待てと悲鳴をあげるところだった。

## 11.

この発明品の欠点は制御の難しさだった。

空中は三次元だから、制御するほうも立体的な動きを把握できなければならない。これがリモコンからでは馴れるまで難しい。下手なエンジンの噴かし方だと、コマのように身体が回り始めてしまう。そうなると、なかなか回転を止められない、らしい。

さらに本来は飛行船に使うエンジンだから、導力エネルギーの供給が過剰気味で出力を絞るのが大変なのだという。目に見えないエネルギーというものの取り扱いの難しさを実感してしまう。

人形に取り付けて実験したジェッター一号と二号は、空中でくるくる回転したあげく、暴走を始めたエンジンを制御しきれずに、空の彼方に飛んでいった。

万が一のために付けていたロープを引き千切って、だ。

三号機まで失うわけにはいかずにお蔵入りしていたというわけだ。

だがそれを聞いたとき、ナイアルは閃いたのだ。

「あれ、使えねえか？　あの眼鏡」

あっと小さく声をあげたのはティータだ。

ラッセル博士の発明品。導力エネルギーの流れを見ることができるという眼鏡を使えば、出力の制御を楽にできるのでは、と思ったのだ。

「で、でも、ナイアルさん。あの眼鏡を掛けちゃうと周りが見えなくなっちゃうんですよ」

「そうだった！　そいつはマズイな」

ベランダの端から猫まで一アージュだ。わずかな距離だが、導力エネルギーの量だけ調節していればいいというものではない。ただでさえ難しい飛行制御を目を閉じてやるようなものだ。

「何がまずいんですか？」

ドロシーが尋ねてくる。

「何がって、ここからあそこまで目を瞑ったまま歩けってことだぞ？　距離が短いって言っても、地面の上じゃなくて空中だからな。縦横高さを完璧に把握してねえと……」

「できないんですか？」

不思議そうに言われて、かっとなって怒るところだった。

思い出したのはツァイスに来た時の飛行船でのやりとり。

もしかして……。

いや、もしかしなくても。

「おまえ、できるの？」



「たぶん」

ドロシー・ハイアットは一度見た風景を忘れない。

だけではなかった。立体的に覚え込んでいるとドロシーは主張しているわけだ。

ごくり、とナイアルとティータはふたり同時に唾を呑む。

可能かもしれない。ドロシーの能力が本物ならば。だが――
―。

「みゃ～う！」

コソ泥第一発見者の英雄のか細い鳴き声が聞こえた。その声を聞いて、ナイアルの決心がついた。乗りかかった泥船だ。ドロシーはナイアルの相棒なのだ。

ここは賭けるところだ。

命綱は欲しいが。

「ティータ。こいつにリモコンの使い方を教えてやってくれ！
三分でだ！」

「は、はいっ」

「ティーちゃん、よろしくぅ」

こんなときでも口調は変わらないのがドロシーだった。

ナイアルはその間に、トランス主任からロープを借りる。自分の身体に結び付け、もう片側をベランダの柱に結んだ。身体のほうにロープを付けるのがポイントだ。いざとなればベルトを切れば自分は星にならずに済む。その余裕があれば、だが。

ティータのレクチャーが終わり、ナイアルはベルトを装着した。

「いーですか、センパイ？」

「お、おう。やってくれ！」

おっかなびっくりで背筋を伸ばす。

「ダメですよ、先輩。リラックス、リラックス」

「できるか！」

重心が安定しないからリラックスしろと言われていたが、どうしても全身が緊張してしまい、金属の棒でも呑み込んだみたいに動きがぎこちない。

「仕方ないですねー。では――行きます！」

眼鏡を掛け、ドロシーがリモコンのスイッチを入れた。

ナイアルの腰に巻いたベルトの左右からゆっくりと風が噴き出してくる。どんぐりの向きはまだまっすぐだ。ナイアルの足の裏が静かにベランダから離れた。

――浮いた！

「こいつは……すげえな」

「ドロシーさん、ゆっくりです」

「だめだよ、ティーちゃん！」

「え!?」

ティータが戸惑った。なんだ、とナイアルも思う。何か

ティータは間違ったのか？

「ドロシーお・ね・え・ちゃん、だってば！」

「そこかよっ！」

ナイアルはわめいた。その瞬間にバランスが狂って、空中で前のめりに倒れそうになる。足の裏はもう半アージュほどベランダから離れてたのだ。

「う、わぁ！」

「センパイ！　動かないで！　っと、よいしょ！」

眼鏡を跳ね上げたドロシーがぐりぐりっと手元を動かした。何をどうしたのかはさっぱりわからない。ベルトについた左右のどんぐりが少し向きを変えたことと、一瞬だけジェットが強く噴いたのは辛うじて感じ取れた。

それだけでナイアルの倒れた身体がぐっと持ち上がって元の姿勢に戻る。

「す……ごい。三軸の制御ってただでさえ難しいのに」

ティータが感嘆の声をあげる。

しかも、ドロシーは即座に眼鏡をかけ直して導力エネルギーの流れをチェックしていた。いつものトロさからは信じられない。

「ドロシーさ……おねえちゃん、ちょっとずつ動かせますか？」

「うん。だいじょうぶだと思うよぅ。ほら、これで前進っと……」

くいっとリモコンの両のレバーを倒すと、ナイアルの身体が空中で同じ姿勢を保ったまま、すーっと前に動いた。

「おお。すげえ」

「これで右回転」

くるっとナイアルの身体が右に回る。

煙突のほう──アントワーヌのほうに身体が向いて、ぴたりと止まった。

驚くのは、この時点では眼鏡をかけ直していてドロシーからはナイアルが見えていないということだ。つまり、ナイアルの姿勢も位置も、ベランダの構造もぜんぶ頭の中に入っているということになる。

──とんでもねえな……。

オーバルカメラの天才は、空間把握の天才でもあったわけだ。

「もう一回転だってできますよぅ」

くるっと、さらに三六〇度回って止まる。

「左回転っと」

逆回りに回った。

## 12

目が回った。

「縦回転だって──」

「おいやめろ！」

「やれるけど、今はそれどころじゃないですから、やらないですよぅ」

「ぜってー、やる気だったろ！」

「やだなあ、センパイってば、あはは」

ナイアルの身体がゆっくりと前進する。

ベランダの柵を越えた。

もう足の下には何もない。五階の高さぶんの空気があるだけだ。ナイアルは下を見ないことにした。絶対怖い。両手がじっとりと汗ばんでいる。喉がカラカラだ。

もし、ここで空中浮遊器のエンジンが暴走したら……。

「ああっ！」

ドロシーが叫んだ。

心臓が口から飛び出そうになった。

「ど、どうしたの、おねえちゃん！」

「あ～～～～～～～～～っ」

世界のすべてに絶望したかのような声をドロシーがあげる。

──な、なんだよ、おい！

ナイアルの額に汗がにじむ。太陽が目に入った。ふいに自分のいる位置を自覚してしまう。ここからだと、ツァイスの街が一望できるのだ。

南に広がるリベール王国一の工房都市の姿が視界いっぱいに見えている。

街並みがまるでおもちゃのようだ。

人の姿は豆粒で、それぞれが勝手気ままに動いている。

絶景ではあった。

けど、この風景が今生の見納めとか嫌すぎる……。

「お、おねえちゃん……」

「はあ。はあぁ」

ドロシーがため息をついた。導力が見えている眼鏡は光を通さなくなっているので、ナイアルからでは黒メガネをかけたようにしか見えない。表情も見えなかった。

「おい、なんだってんだよ？」

「たいしたことじゃありません。先輩はどうぞそのままお願いしますー」

そう言いながらリモコンを操る。

ナイアルの身体は宙を滑るようにして、じりじりと煙突のほうへと進んでいった。

気にはなるが今はそれどころではない。

「よしよし。もう怖くないからな……」

文字通りの猫撫で声を出しながら、ナイアルはゆっくりと

アントワーヌに向かって手を差し伸べていく。

警戒するように身体を遠ざけていたアントワーヌだが、煙突の傘の上をそれでも少しずつ動きながらナイアルのほうにやってくる。

伸びてきた腕に向かってアントワーヌがにじり寄り、ついに足の先が付いた。

そのままナイアルのシャツに爪を引っ掻け、腕を昇ってくる。ナイアルは両腕で無事にアントワーヌを抱え込み――

そのとき予期せぬ突風が吹いた。

「うわあああ！」

「にゃぉお～～ん！！！」

身体が回転を始める！

「ナイアルさん！」

ティータの叫びが耳を打つ。

ナイアルの脳裏に星になったというジェッター一号と二号の話がよぎり、最悪の事態が来たかと覚悟を決めた。だが、なんとかアントワーヌだけでも――。

がくん、っと全身に衝撃が走る！

身体にロープが食い込んだ。

「おごわっ！　いてえぇ」

突風が収まり、ナイアルの身体はロープ一本で中央工房の壁沿いにぶらんと吊り下がっていた。

そのままゆらゆらと揺れる。

「だいじょうぶですか、先輩！」

上からドロシーの声が降ってくる。

「おう！　な、なんとかなっ」

「今、あげますからそのままで」

どうやって、と聞くまでもなかった。ふたたびジェットの噴射が始まり、ナイアルの身体がゆっくりと持ち上げられていく。

突風を受けてナイアルが悲鳴を上げた瞬間に、とっさに導力をすべて切ったドロシーの機転のおかげだった。

そうなれば、命綱があるから単純にぶらさがるだけで済む。単純な解決法ではあるが、その判断は誉められていいだろう。

運もよかった。アントワーヌを助ける前だったら、ナイアルは助かっても、突風でアントワーヌのほうは落ちていたかもしれない。

アントワーヌを抱えたまま無事にベランダへと戻った。

見守っていた工房の全員から温かい拍手が降り注ぐ。フーゴが猫缶を持ってアントワーヌを迎えにきた。「にゃゃゃぁ～」と鳴きながらアントワーヌが猫缶に突進する。

それを見ながら、ナイアルはようやく安堵の息をつく。

――今度こそ死ぬかと思ったぜ。



「ナイアルさん、ありがとうございます！」

ティータが深々と頭を下げてくる。

「あー、いや。なんてことねえよ」

「いえ、そんなことないです。工房のみんなもほんとに喜んでます。アントワーヌは大事な友人ですから」

ベランダで死にかけたこともとっくに忘れたとばかりに嬉しそうに猫缶を食べるアントワーヌを見て、みんながにこにこしていた。

「そうだな……ま、助かってよかったぜ」

「はい！　ナイアルさんも無事でよかったです」

「ああ。まったくだ。それと……」

ナイアルはベルトを外してティータに渡した。

「ラッセル博士の発明品が人の役に立つってことも実証できたしな」

そう言うと、ティータは驚いたような顔をしてから、誇らしげな顔になって、「はいっ！」と元気よく答えた。

問題点もあるものの、確かにアルバート・ラッセルは立派な発明家のようだ。

良い記事が書けそうだ。

ナイアルは思った。それから、ふと気づく。

「そういや、ドロシー。さっきの悲鳴はありゃ、なんだったんだ？」

ひとつだけ残った謎を問いかける。

「いえ、たいしたことではないのですが……」

「なんだよ」

「わたしがリモコンを操ってしまうとですね」

「おう」

「せっかくの、稀代の発明品を操っているわたしの勇姿を誰も写真に撮ってくれないじゃないですか。とゆーか、わたしは自分で撮りたかったです」

真面目な顔でそう言った。

「……それだけ？」

「まったく残念です。はぁ……。絶好のシャッターチャンスだったのに……」

ドロシーは、ふかーいため息をついた。

ナイアルの心の中で何かがぷちっと切れた。

「よーしわかった。たっぷり撮らせてやる。ただし、今度は自分で体験しつつな！」

「えっ？　あの、えっ？」

ティータの持っているベルトを奪い取ってドロシーににじり寄ると、ドロシーはちょっと待ってくれと繰り返しつつ、じりじりと後ずさりをしてゆく。

「いえわたしは写真が撮りたいのであって、実験材料になりたいわけでは……」

「遠慮するなよ、なあ」
「いえ、遠慮しますよぅ。あ、あの、いやですー」
「あ、こいつ！　逃げやがった！」
　廊下へと逃げてゆくドロシーを追って、ナイアルも駆けだした。
　猫缶に突っ込んでいた頭を上げ、ふたりの追いかけっこを見送るアントワーヌが、呆れた顔をしつつも、ありがとうと言うように「にやゃゃあ～」と鳴いた。

END

# 『零の軌跡』ドラマCDシリーズがついに完結！

### ドラマCD『英雄伝説 零の軌跡 第4章～忍び寄る叡智～／終章～クロスベルの一番長い日～』



# キャストコメントを独占入手!

**2011年の12月に発売されて以来、約1年半にわたってリリースされてきた『零の軌跡』ドラマCDシリーズが3月27日についに完結する。本誌は収録を終えたばかりの収録現場に潜入し、キャスト陣のコメントを独占入手することに成功したぞ!**



## エリィ・マクダエル 遠藤 綾



■収録を終えられた今の気持ちをお聞かせください。

遠藤：終章の最後のほうのシーンでは「まだまだこれから」と言っているので、私自身もエリィ達と同じで終わった感じがしないですね。それこそまだ支援課としてちょっとしか成長していないような気がするので、正直終わった感じはしていないです。ひとつ乗り越えてまた次が来るような気配がしていますね。

■今回は本編のほかに、ミニドラマも収録されています。そちらに関してはいかがでしょうか。

遠藤：本編に関しては、エリィを演じているなかでゲームもありドラマCDもあり、それこそ一番最初の戦闘ボイスから始まっているので、彼女のことを少しずつわかっていった感じがしています。普段あんまり関われないキャラクターの日常や正確がわかったのはちょっと面白かったし、他にも見てみたい人がたくさんいるんですよね。毎回短いですけどインパクトが大きいですから。エリィも普段見せない可愛らしい一面を出したりしていて、短いのをもっといっぱい聞きたくなります。

■聞いていただいたファンの皆様にメッセージをお願いします。

遠藤：『零の軌跡』にこんなにも長く関われるとは私も思っていなくてとても楽しかったですし、今回はこれで終わるんじゃないっていう感じが救われたい終わり方だったなと思います。皆様に聞いていただいて本当に嬉しいなと思いますし、応援によってはシリーズがもうひとつありますからね。それが期待できるように応援し続けていただけたら嬉しいなと思います。よろしくお願いします！



## ロイド・バニングス 柿原 徹也

■収録を終えられた今の気持ちをお聞かせください。

柿原：数年かけてやってきた『零の軌跡』シリーズがこれをもって完結するということで、寂しい気持ちはもちろんあります。でもその寂しさとは裏腹に、ロイド達が『碧の軌跡』の新しい冒険へと進めるのかなと思うと希望にも感じられました。

■今回は本編のほかに、ミニドラマも収録されています。そちらに関してはいかがでしょうか。

柿原：普段の『零』も日常と事件の現場でのバランスが非常に愉快で、やっていて楽しいのですが、おまけはさらに楽しく……シリアスさはまったくございません！（笑）　スピンオフとして楽しんでもらえればと思います。今回ガイとの会話があったのですが、お兄ちゃんと会話できるシーンはそんなに多くはないので、そこも聴きどころです。

■聞いていただいたファンの皆様にメッセージをお願いします。

柿原：長い期間『零の軌跡』シリーズを応援してくださった方々、本当にありがとうございます。長い年月をかけてドラマCDを録ってきましたが、この期間をかけないと出来ない重量感のあるストーリーなので、それくらい皆さんも時間をかけてプレイしてくださったんだろうなと思います。心の底から皆さんに楽しんでいただけたかなと、今回の終章を録り終わったところで感じました。おかげで『碧の軌跡』も発売されましたし、新たな展開があると信じてやみません。皆さんの応援が次につながるので、是非ゲームをプレイしてCDを聞いて、次の『軌跡』に備えていただければ嬉しいです。





## ランディ・オルランド 三木 眞一郎

■収録を終えられた今の気持ちをお聞かせください。

三木：ゲームの内容に沿ったドラマということで、あんまり尺の長いものを作るのは難しいのかなと思っていたのですが、とても綺麗な形で終えることが出来ました。でも、ランディとも付き合いが長いので……寂しくもありますね。

■今回は本編のほかに、ミニドラマも収録されています。そちらに関してはいかがでしょうか。

三木：緊張感のある生活をしている彼らの側面が見られるので、短いけれど聞きごたえのあるドラマになっていると思います。

■聞いていただいたファンの皆様にメッセージをお願いします。

三木：今回『零の軌跡』ドラマシリーズが完結となります。皆さんの応援のおかげで、ここまでくることが出来ました。大変感謝しております。しばらくランディとも会うことがなくなってしまいますが、彼らの世界の中で彼らは生き続けています。皆さんもこの作品を愛し続けてくだされば嬉しいです。





## ティオ・プラトー 水橋 かおり

■収録を終えられた今の気持ちをお聞かせください。

水橋：2011年の12月からこんなに長い間お付き合いいただいていたのかという…素直にびっくりです。お話がすごくしっかりしているので、こうして続けて出させていただいているのもずっと応援してくださってる方がいるってことですから。いくら出したいと思ってても売れてなかったら出せませんですからね。まずはそこをありがとうございます！

フルボイス版の『Evolution』を録った時は一人だったんですけど、こうやって集まってやるのはやっぱりいいですね。ゲームが苦手な方も聞いていただけるのでありがたいです。

■今回は本編のほかに、ミニドラマも収録されています。そちらに関してはいかがでしょうか。

水橋：お話が真面目に進んでキャラもしっかりしているので、時々キャラいじりしたくなりますよね（笑）。ロイドさんは毎度のことですけど、だいぶマイルドなほうですよ！　キャラが立ってるのでこういうのは個人的にはすごく好きです。面白いですよね。

■聞いていただいたファンの皆様にメッセージをお願いします。

水橋：この『零の軌跡』話はここで終わっているわけではなくて、実は『碧の軌跡』というお話につながっているんですよ。『碧の軌跡』では私が気になっていた「キーアはなぜ愛されるのか」っていう疑問にもびっくりするような形で答えを出してくれていて、すごく好きです。ゲームをやっていて普通に感じた疑問にすごい答え合わせを出してくれるので、それをドラマCDでも聞きたいなーと思っていただけると続きも出るかと思います。そこはまだフルボイス化してないので、是非やりたいところです。よろしくお願いします！





## キーア 釘宮 理恵

■収録を終えられた今のお気持ちをお聞かせください。

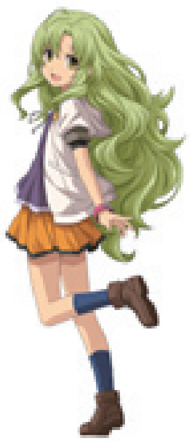
釘宮：今回も楽しく演じさせていただきました！　終章ではゲームでもシリアスな展開になってキーアも参加していて、最近はずっと楽しいイメージがあったのでこういう真面目なシーンもあったなあと思いながら懐かしく思いました。

■今回は本編のほかに、ミニドラマも収録されています。そちらに関してはいかがでしょうか。

釘宮：長い間お付き合いしている作品のキャラクターなので、こういうギャグシーンをやれるのがすごく楽しくて、もっとどんどん掘り下げていっぱいやれたら嬉しいなと思います。ギャグが似合う人達でもあるので（笑）。

■ファンの皆様にメッセージをお願いします。

釘宮：応援してくださっているファンの皆様のおかげで、すごく長く深くお付き合いさせていただいていて嬉しい限りです。『零』のほうは一旦落ちつきを見せましたところで『碧』にやれることがいっぱいあるんじゃないのかなと期待しておりますので、今後も皆様とこの作品を通してお会いできたら嬉しいなと思っております。これからも応援してください。よろしくお願いします！



▶ドラマCDの詳しい情報は、ファルコムニュースをチェック!

# 人生半キャラずらし



**jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！**

**「PLUS MIX VERSION from Ys,YsⅡ,SORCERIAN&STAR TRADER」**

こんにちは、jdkBANDドラマーのオカジです。

最近ニコニコ動画にアップされたjdkTV UTILITY Vol.2はご覧頂けましたでしょうか。こちらの番組の最後に、僕は「PLUS MIX」というものに挑戦しております。「ダイナソア」の「INTO THE CASTLE」という曲を演奏しているのですが、いかがだったでしょうか？　なかなかおもしろいものができたのではないかと自負しております。ですが、この「PLUS MIX」というアレンジ手法は決して僕が創りだしたものではありません。FM音源で作られた楽曲に生演奏を「プラス」してアレンジしていくというこの斬新な編曲手法は、ファルコムの名アレンジアルバムを数多く手掛けた難波弘之氏の手により、1989年、「Falcom Special Box'89」に収録された一枚として産声をあげたのでした。ただこのあまりに斬新なアレンジ手法は、残念ながらその後長く続くものにはならず、「PLUS MIX VERSION from Ys,YsⅡ,SORCERIAN＆STAR TRADER」の一枚を最後に「PLUS MIX」という冠を持ったアルバムは発表されることはありませんでした。

しかし現在、チップチューンという音楽ジャンルなどが世界的に拡がりを見せ、さらにはそこに生演奏を加える事すらポピュラーになりつつある時代が到来しています。ある意味、これは「PLUS MIX」というアレンジ手法が二十数年余りの時を経て世界に認知されたのだと言っても過言では無いのではないでしょうか。

そういう意味でも、今回紹介する「PLUS MIX VERSION from Ys,YsⅡ,SORCERIAN＆STAR TRADER」というアルバムは、音楽の進化の歴史の上でも重要な一枚であると言えると思います。

また僕個人としても、偶然の思いつきで、突然jdkTVで始めた「PLUS MIX」ではありましたが、ファルコムが世の中に残した音楽的遺産を現jdkBANDのドラマーである僕が、ここで改めて過去を知らない世代に向けても発表できるという幸運に恵まれました。この機会に是非、色々な楽曲に挑戦し、また僕だけでなく他のjdkBANDメンバーや、様々な優秀なミュージシャンにも参加してもらい、おもしろい作品が作っていけるのではないかと企んでおります。

今まで何度となく言ってきてるのですが、僕はマジメな話、ファルコムのFM音源の音楽が、自分の中の「音楽の原体験」だと言っても過言ではありません。そんな自分がドラムというかなりアナログな楽器を選び勉強し、それなりに苦労もしながらもプロになり、そして今、「PLUS MIX」を通してFM音源とグルーヴするという構図は、ある意味、僕の人生そのものなのかもしれませんね……！

さてさてそんなわけで、今回はかなりマジメにお届けしてきたわけですが、jdkTVで「PLUS MIX」を知った方も、是非この「PLUS MIX VERSION from Ys,YsⅡ,SORCERIAN＆STAR TRADER」というアルバムを聴いてみて下さいね。おもしろいですよ！

それではまた次回お会いしましょう〜！




ザ・ボーカル・フロム・イース
PLUS サラウンドシアター・ソーサリアン&プラスミックス



## 岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

ファルコム楽曲4,118曲をiTunesで世界111ヶ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

※iTunes配信中のコラム関連アルバム情報※
**【ザ・ボーカル・フロム・イース+ サラウンドシアター・ソーサリアン&プラスミックス】**
価格：ＣＤ版2,079円(税込)　iTunes配信版1,500円(税込)
収録曲数：全29曲
※過去に発売されたマキシシングル3タイトル「The Vocal from Ys」「Surround Theater Sorcerian」「PLUS MIX VERSION from Ys, YsII, SORCERIAN&STAR TRADER」を1つにまとめたアルバム作品です。
※コラムで紹介されている「PLUS MIX VERSION from Ys, YsII, SORCERIAN&STAR TRADER」単体のマキシシングルは現在発売されておりません。

**≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫**
**http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html**

# コテ放題

コテカナことjdkBANDボーカル小寺可南子が
ゲームと共に、好き放題な日々のことを描くコラム!!

**▶PROFILE**



日本ファルコムのゲームソングを奏でる専属バンド"jdkBAND"のボーカル。webラジオ「ファルコムラジオ"めんどくさいです…でもがんばります"」では声優水橋かおりさんと共にパーソナリティをつとめる。その他CMソング、ジングルなど活動は多岐に渡る。
twitter @cana_ko_tera

## 第2回　コテカナ最終計画……始動!?

まいど！　コテカナです！
　この連載も3回目ですね。前回は音楽の素晴らしさを語るつもりが、いつの間にか「女性キャラの肉体美」にスポットを当てて終わる……という、ミュージシャンとして（女としても）あるまじき展開になってしまい猛反省です。
　いやでもほんと出てくるおにゃのこみんな素晴らしいおっｐ（自主規制）。
　音楽といえば、零えぼはアレンジされた楽曲も魅力！
　2コーラス目にギターソロが♪なんてこともあり、そんな変化を感じたくて雑魚戦でも2まわし分聞いてから倒してみたり、いろんな場所の音楽聞きたさにサブクエスト必死系になったり……な、なかなか進みません！　助けて鬼編集長！












**2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪**

**ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります**
■**配信日**　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■**メインパーソナリティ**　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■**公式ホームページ**　http://www.falcom-radio.com/

## 第68回-第69回　柿原徹也（『零の軌跡』ロイド・バニングス役）

68、69回のゲストは、久しぶりの登場となる特務支援課のリーダー・ロイド役の柿原徹也さん。「ティオのつぶやき」コーナーをはじめ、回を追うごとにいじられキャラになっていくロイドを演じられているということで、トークコーナーでは柿原さん自身も終始いじられっぱなしの回となった。また、「出発！特務しれん課」のコーナーでは、『零えぼ』のクイズ企画がスタート。まだまだプレイ途中のコテさんはもちろんのこと、やりこんでいるガチくん、しおりんでさえ苦戦する難問が続出した。

### ▶第68回-第69回の舞台裏◀

番組の最後でゲストの方が行なっている提供のセリフ。これは当日の打ち合わせの段階で振られ、あとは本番の収録の中で初めて披露されるという、アドリブの演技になっているのだ。69回でついに本人の手により爆発してしまったロイドさんにブースは爆笑の渦に巻き込まれた。

## 第70回-第71回　遠藤綾（『零の軌跡』エリィ・マクダエル役）

70回、71回は、過去最多、4度目となるゲスト出演となった遠藤綾さんが登場。３月27日にキャラアニより発売されるドラマCD『零の軌跡』の収録を終えたばかりということもあり、『零えぼ』キャラアニ限定BOX特典としてついてきたドラマCDの１エピソードが流されるなど、全体的にドラマCDに注目したゲストパートとなった。また、ある意味エリィの名セリフにもなっている「何かしら、これ」収録の裏話も披露された回となった。

### ▶第70回-第71回の舞台裏◀

ゲストパートで話題になったエリィの料理失敗時のセリフ「何かしら、これ」。このセリフは『零』と『碧』とで、ニュアンスがかなり変わった形で収録されたため、『零えぼ』収録の際には、遠藤さんに『零』バージョンで！　というオーダーがされ収録されたのだ。



### 今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

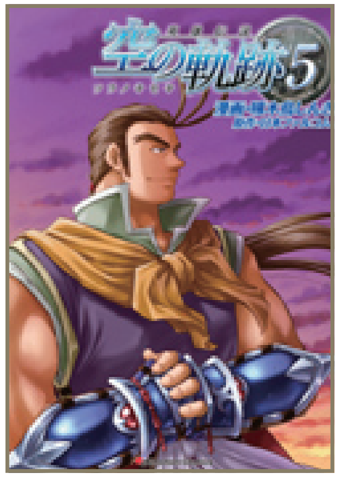
# ▶ファルコムニュース◀

**ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！**

## 英雄伝説 空の軌跡　5

### ラッセル博士奪還計画!

バンダイビジュアルのＨＰで好評連載中のコミック第５巻。誘拐されたラッセル博士を探し、ドロシーの写真を手がかりにレイストン要塞へと辿り着いたエステルたち。数々の障害を乗り越えて博士と再会を果たすが、要塞の兵士に侵入を気づかれ絶体絶命のピンチに。その時、エステル達の窮地を救ったのは…!?　バンダイビジュアルより３月７日発売。630円(税込)。




## 空の軌跡外伝 レーヴェ物語　3

### 獅子の物語、ついに完結!

前号のファルコムマガジン本誌で最終回を迎えた『レーヴェ物語』が早くもコミックスで発売！　いよいよ最終段階を迎えた結社の《福音計画》。各地の遊撃士たちは世界のため、全力で立ち向かう。レーヴェとヨシュアの過去に渦巻く闇を見たエステル、自らの心の中で欺瞞と戦うレーヴェの選んだ道とは……。メディアパルより３月７日発売。945円(税込)。




## 英雄伝説 零の軌跡 第４章～忍び寄る叡智～／終章～クロスベルの一番長い日～

### 特務支援課の最後の戦いと休息

『零の軌跡』ドラマＣＤシリーズの４章、終章が同時発売。『零の軌跡Evolution』の特典で好評だったドタバタおまけシリーズもパワーアップして収録。ロイドたち特務支援課の活躍をゲームとは一味違った形で楽しめる１枚だ。キャラアニ購入特典ではここでしか聴けない豪華なキャストコメンタリーを収録。キャラアニより３月27日発売。6300円（税込）。







## イース THEアートブック

### 25年の歴史が今ここに!

歴代「イース」シリーズのイラストを集めたアートブックがついに登場。８ビットＰＣ時代の「イース」シリーズからPS VITAで発売された最新作「セルセタの樹海」のイラストまで、関連イラストを可能な限り収録。ファンの心を掴んで離さない、25年の歴史をイラストで振り返る保存版だ。ソフトバンククリエイティブより発売中。3360円（税込）。






## 英雄伝説 零の軌跡Evolution 無料版

### 新感覚を体験しよう!



2012年10月に発売されたストーリーRPG『英雄伝説 零の軌跡 Evolution』。フルボイスでより奥深いドラマを魅せた本作の無料版がPS Storeで配信中だ。序章が丸ごとプレイできる仕様となっているので、気になっている友人にオススメしてみるのもいいかも。ダウンロード方法など詳細は公式HP（http://www.zero-full.com/index.html）でチェックしよう。







## 英雄伝説 空の軌跡SC：改 HD EDITION

### 大巨編ストーリー RPGがPS3で!




ＦＣの衝撃のラストから新たに冒険が始まる『英雄伝説 空の軌跡ＳＣ』がPlayStation（R）3で発売される。ＰＳＰ版のセーブ＆クリアデータを共有することができるので、外出先でも気軽にプレイすることも可能だ。高音質化して聴き応えばっちりのゲーム内楽曲や、描き下ろしの壁紙データなどEXTRAコンテンツも見逃せない。４月25日発売。4830円(税込)。




## 英雄伝説 空の軌跡シリーズ Windows8対応版

### エステルとヨシュアが帰ってくる!

重厚なストーリーと魅力的なキャラクターたちで現在もロングランヒットを続けている「空の軌跡」シリーズの３タイトルがWindows8対応バージョンで発売決定。パソコンユーザー初心者でも簡単な設定で、美麗なグラフィックを隅々まで堪能できる仕様となっている。この機会に遊撃士たちの物語をじっくり楽しんでみよう。４月12日発売。各3990円（税込）。



# FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！










① 2名様

**❶空の軌跡外伝 レーヴェ物語③**
《剣帝》レーヴェの視点から描く物語がついに完結。３月７日に発売となる第３巻を応援してくれたマガジンの読者へ！

② 1名様

**❷英雄伝説 空の軌跡⑤**
ファルコム愛溢れるイラストコラムが大人気な啄木鳥しんき先生が描く『空の軌跡』第５巻が登場！

③ 1名様

**❷jdkバンドボーカル・小寺可南子サイン色紙**
コテ放題は今月号も絶好調!? マガジン読者へ日頃の感謝を色紙に込めて皆様にお届けします！

## プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

- ●下記のメールアドレスをご記入ください。
- ●「vol.25プレゼント係」とご記入ください。
- ●お名前（ペンネーム可）をご記入ください。
- ●右記の記事一覧から、今月号で一番面白かった・つまらなかった記事をご記入ください。
- ●ご意見・ご感想などをご自由にご記入ください。
- ●希望するプレゼントの番号をご記入ください。

宛先：
件名：vol.25プレゼント係
○○○○○○○○○○
◆
面白い：
つまらない：
◆
○○○○○○○○○○
◆
1

**【記事一覧】**

1：英雄伝説 閃の軌跡 潜入レポート
2：『みんな集まれ！ファルコム学園』
3：『よりぬきレーヴェさん（嘘）』
4：『クロスベルぷらす』
5：『ヴァンテージマスターがやってきた！』
6：jdkバンドドラマー・オカジの人生半キャラずらし
7：jdkバンドボーカル・コテカナのコテ放題
8：ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばりますの舞台裏
9：ドラマCD『零の軌跡』のキャストコメントが到着！
10：FalcomFanArt Collection
11：ファルコムニュース

**宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp** 応募締め切り **3月25日**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。



# Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



**椿原ゆう**
たくさんのキャラと親交が深められ、いろんなお話を聞けるのが楽しかったです。各キャラによって胸、ふとももも、おへそと強調されているのでとても目の保養にもなりました。ご馳走様です！閃の軌跡も期待しています！

**『英雄伝説 碧の軌跡』(2011)**
2010年に発売された『零の軌跡』の続編として発売されたストーリーRPG。前作から人気の高かった旧市街の不良グループのヘッド・ワジは、今作では物語において重要な立ち位置のキャラとして活躍する。

英雄伝説 零の軌跡

# 四つの運命

著者：田沢大典　イラスト：松竜



特務支援課はここから始まった!!

©Nihon Falcom Corp. All right reserved.

日本ファルコムの大ヒットRPG「英雄伝説 零の軌跡」から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！

原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）

価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

英雄伝説 零の軌跡

# 午後の紅茶にお砂糖を

著者：むらさきゆきや
イラスト：窪茶




日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『零の軌跡』・『碧の軌跡』の主人公【特務支援課】の日常は意外とまったり!?　本編とは一味違った彼らのゆる〜い毎日を描いて『月刊Falcommagazine』で大人気を博したノベライズがついに単行本で登場！

©Nihon Falcom Corp. All right reserved.

12月6日発売!!

価格：1,155円（税込）
ISBN：978-4-89610-255-0

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp





# 月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.25


| | |
|---|---|
| 発行人 | 田中一寿 |
| 発行協力 | 日本ファルコム株式会社 |
| 編集 | 小渕智幸<br>大場恵美子 |
| ライティング | 宮崎洋平 |
| デザイン・DTP | さとうだいち |
| 表紙ロゴデザイン | 荻窪裕司（ビーニーズ） |
| 発行 | 株式会社フィールドワイ<br>〒 101-0062<br>東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F<br>TEL 03-5282-2211（代表）<br>http://www.field-y.co.jp/ |
| 制作・販売協力 | シナノ印刷株式会社 |